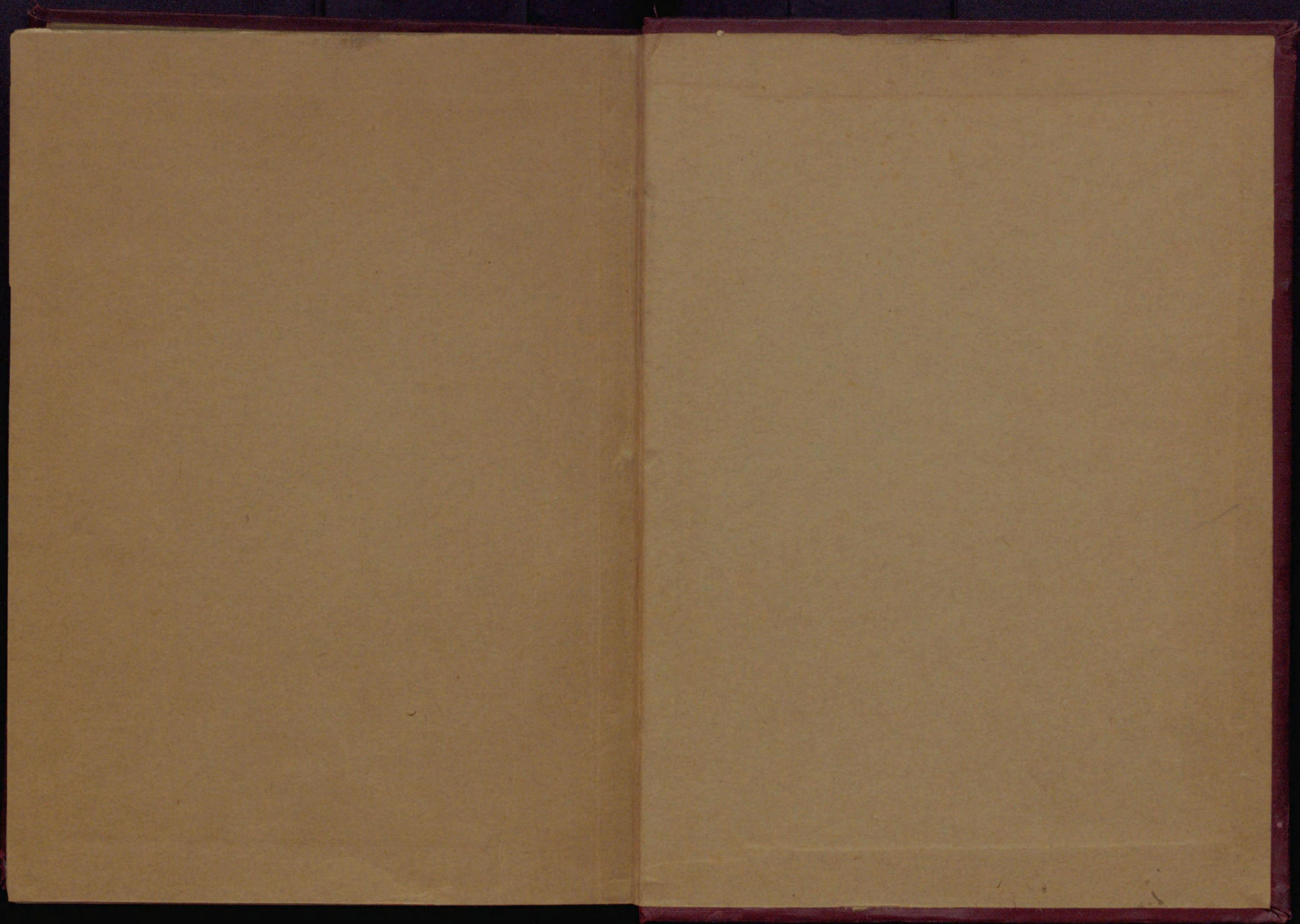


E47
23

647-23



1200501568312



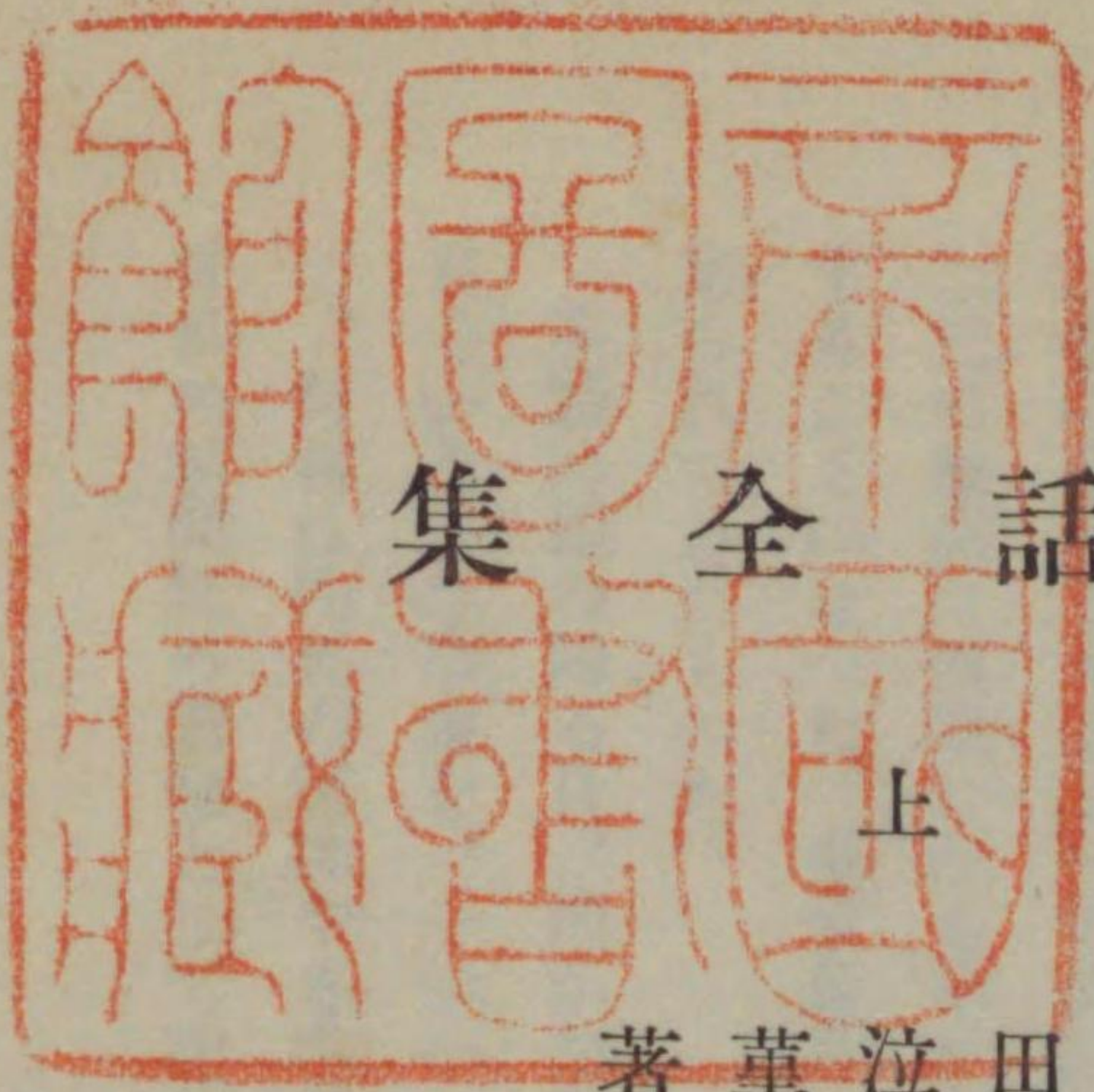
647

23

茶話全集
上卷

創元社

469



茶話全集

上

薄田泣菫著



創元社

647-23

茶話全集

著者 菅野 田

源 天 除

はしがき

本書は茶話といふ題目のもとに、大正五年の春から、三四年間、大阪毎日新聞紙上に掲載したものを、間もなく三巻に分けて出版し、その後新に起草したもの約一百篇を増補し二巻に分けて大正十三年大阪毎日新聞社より発行したものへ、更に程經て東京日日新聞や二三の雑誌に執筆したものを附け足して、ここに茶話全集上下二巻として創元社より上梓することになつた。東京日日に掲載以後のものは、拙著「猫の微笑」と「艸木虫魚」に收められてゐたものだ。

茶話は雨の降る日、静かな窓に凭れて、苦い茶を啜りながら、次から次へと頭に浮んで来るいろんな事象を、一つ一つ微笑をもつて迎へる著者の境地をそのまま書き綴つたもので、材料は内外の書物や外字雑誌から得たものもあり、また他から聞いたものもあるが、日日の新聞紙の讀物として起草した關係上、時日を隔てた今日になつて、それを讀み返す

と、當時と比べて大分感じや印象が違つて来る文字が少くない。例へば政友會内閣當時原敬氏に與へるつもりで書いたものが幾篇があるが、原氏が歿くなつた今日になつてみると、説法の相手が居なくなつたやうで、一寸變な氣持がしないこともない。然し讀者の誰彼がそれを讀んで、自分の事でも言はれてゐるやうに思つて、こつそり頭を搔く分には少しも差支ない。

茶話の執筆は、前後三四年にわたつてゐるし、その間著者の内生活にも動搖があつたので、ある篇と他の篇とは、材料の取扱ひ方に大分違つたところがあるのは、讀者の誰もが氣づくことだらう。

この書の上梓について、前の茶話出版者、とりわけ大阪毎日新聞社から快諾を得たことを厚く感謝する。

昭和八・八・八

著者

目次

燒肴は右か左か……………	一	文豪と旅宿の亭主……………	三〇
油蟲嫌ひの皇帝……………	三	毬を返せ……………	三三
大食と少食……………	六	五千弗の提琴……………	三五
滑稽作家演説を盗まる……………	八	劇作者と舞臺監督……………	三七
主人の頭を叩く女……………	二一	文豪の原稿……………	三九
一千圓の遺産處分……………	二三	御寢間の埃……………	四一
獨身主義者と結婚……………	二六	時計……………	四二
雄辯家の親孝行……………	二八	牧師の惡妻……………	四五
裸體……………	三〇	短い大演説……………	四六
貧乏畫家……………	三三	自動車王と子供……………	四九
音楽家と小説家……………	三六	獨逸帝國の豫言……………	五一
蓮のうてな……………	三六	飯を安く食ふ法……………	五四

人間の大小	二五
婦人と多妻主義者	二五
下腹で猫が啼く	二六
珍らしい廣告	二七
生命の勘定	二七
慈善家の心得	二八
落錢を拾ふ樂み	二八
胃の腑	二九
獨帝の拳骨	二九
天國に結婚のない理由	二九
接吻か二十弗か	三〇
十六人の女房	三〇
俳諧師の頓智	三一
寄附金の請取	三一
骸骨の議員	三二
博士と小學生徒	三九
卵を一つ	三九
十二種の新聞を讀む小僧	四〇
氣取屋の婦人	四〇
女形の心得	四〇
賣子娘	四〇
詩人の健啖	四〇
詩人の握手	四〇
話題	四〇
五十仙の損失	四〇
文豪の娘	四〇
運	四〇
音楽家の大統領	四〇
三弗で	四〇
馬の慈善	四〇

英國首相の恐縮	三三
牛の價	三三
吝嗇の競争	三五
勞働者としての鼠	三七
畫の接吻	二六
子供の少い村	三〇
食事の流儀	三三
農夫の自慢	三三
何故食物が高い?	三三
肉代五弗也	三三
愛國心と胃の腑	三四
名文句	三四
馬は美容に害あり	三四
獨身主義者	三四
梅の下かげ	三四
將軍の舅	四九
魚を食ふ人	四九
婦人の病氣	四九
鼠に噛まれた英雄の心臓	四九
名女優の冷笑	四九
バルザック	四九
猫と四斗俵	四九
喜捨金一文	四九
喫煙禁止	四九
滴水と峨山	四九
豫言者	四九
司令官と一兵卒	四九
前大統領の嘘	四九
接吻	四九
机	四九

お水	一八三
奉納	一八四
醜女の家	一八五
心得	一八七
焼棒杭	一八八
鯛	一九〇
死人の下駄	一九三
高野の英霊塔	一九五
蟲の聲	一九七
赤梅檀	一九九
隠し藝	二〇一
大きな鼻	二〇三
唾	二〇五
紋	二〇七
男裝婦人	二〇九
獨身儒家	二二一
明恵と雑炊	二二三
栗鼠	二二五
廣告欄	二二七
記者へこまさる	二二八
男のお産	二二九
音楽家の頭	二三三
馬が悪い	二三四
手品師と蕃山	二三六
女の舌を	二三八
將軍の手紙	二三三
病氣の必治法	二三三
小粒金	二三五
結婚と奴隸	二三八
相阿彌と鸚哥	二四〇

喫煙家	二四三
出世の秘法	二四四
哲學者の寄附金	二四七
天神様の子供衆	二四九
女優と監督	二五一
華盛頓は死んでゐる	二五三
元帥の諧謔	二五五
ラムの祈禱	二五七
生き髯	二五九
作り髯	二六一
牡蠣を食ふ馬	二六三
尻と腹	二六五
魚の骨	二六七
三十六計	二六九
長い紐	二七一
郭公	二七二
天文學者	二七四
筭問答	二七六
審判の日	二七九
食べ方	二八一
氣轉	二八三
避暑法	二八五
斜視眼み	二八六
阿父の着物	二八八
辯護士	二九〇
黒人の盗み	二九二
歐陽詢と石碑	二九四
蛇	二九六
小説家の面會	二九八
痘面の笑顔	三〇〇

怖い物……………三〇三
 悪物食ひ……………三〇四
 皮肉……………三〇七
 青磁の皿……………三〇九
 獨帝の癖……………三一
 猶太人と狗……………三二
 馬の上から……………三四
 演説の用意……………三六
 鶴山の娘……………三八
 静かな死……………三〇
 頤の外れたのを治す法……………三三
 老畫家と音曲……………三六
 それ猫が……………三八
 演説家の妻……………三一
 洒落た料理……………三三

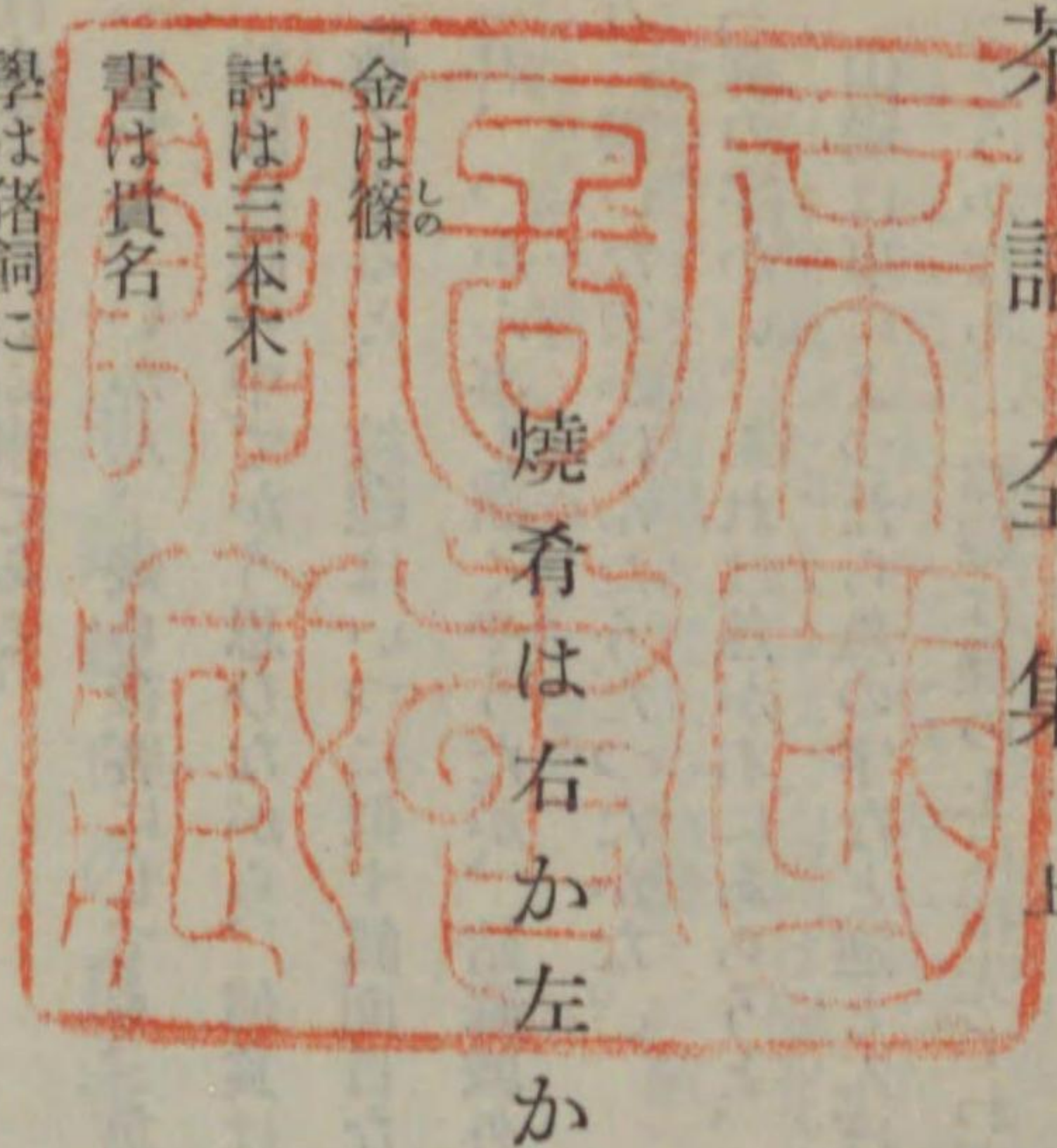
ナポレオンの人差指……………三六
 佛國小説と米國……………三八
 大雅と錦の袋……………三〇
 美術家と驛長……………三三
 詩人を追出せ……………三六
 芽張柳……………三八
 奇癖……………三一
 無學なお月様……………三五
 詩人と百姓婆さん……………三六
 蛇……………三八
 王様と上布……………三一
 名挨拶二つ……………三三
 世界一の名醫……………三六
 書肆と作家……………三八
 夏蜜柑……………三〇

器用な言葉の洒落……………三七三
 當世批評家氣質……………三七八
 大名の駄洒落……………三八〇
 宰相と馬鹿者……………三八四
 男と女の胸釦の相異……………三八七
 自分の葬式に自分の歌で……………三九〇
 滑稽作家の諧謔……………三九二
 小話數則……………三九四
 子供……………三九七
 悪い運轉手と……………三九八
 禪僧と靴……………四〇〇
 寄附金……………四〇三
 大阪の道路……………四〇六
 フォツシュ將軍と葉卷……………四〇九
 黴菌を飲んだ化學者……………四二

首を繋ぐ法……………四二四
 名醫後藤新平男……………四二六
 タフトとお菓子……………四二八
 俘虜紹介狀……………四三〇
 大臣の顔觸……………四三三
 結婚祝ひ……………四三五
 原敬氏と鯛の盆……………四三八
 新發明書物消毒法……………四三〇
 三人牧師……………四三三
 鼻糞……………四三五
 敵と踊る……………四三七
 顯微鏡の寄附……………四三九
 愕堂の日本料理談……………四四一
 停車場の演説……………四四三
 花嫁を忘れる……………四四五

子役の粗忽……………	四七	女房の通辯……………	四七九
人相見……………	四八〇	百圓札……………	四八二
桃の實……………	四八三	お祖母様と黒狸々……………	四八四
仲磨と背中合せ……………	四八五	婦人記者……………	四八六
幸運兒……………	四八七	三哩の言語……………	四八八
船酔……………	四八九	林檎の冤罪……………	四九〇
美人の木乃伊……………	四六一	名香大内山……………	四九二
老人の忠告……………	四六三	各國元首の收入……………	四九四
煙草屋の小僧……………	四六五	木堂と湖南……………	四九六
豚に脱帽す……………	四六七	戀病ひ……………	四九八
悟道……………	四六九	苦力と料理人……………	五〇〇
入場料の儉約……………	四七一		
座頭と花形俳優……………	四七三		
女商人……………	四七五		
女房の手紙……………	四七七		

茶話全集 上



粹は文吉

とは、儒者中島棕隠が自分の友達の特長を歌つたもので、篠は篠崎小竹、三本木は頼山陽、貫名は海屋、猪飼は敬所、文吉といふのは云ふまでもなく棕隠自身の事である。

粹は文吉と云つただけに、棕隠はなかなかの洒落者であつた。ある時知合ひの家へ訪ねてゆ

くと、ちやうど山陽もそこに來合はせてゐて、時分どきだといふので、晝飯の馳走にあづからうとしてゐるところだつた。剽輕で、無遠慮で通つた棕隱は、平氣で坐に上つて往つた。

折角の客なので、主人は棕隱にもお膳を出した。棕隱はじろりと横目で自分の膳と山陽のを見比べてゐたが、つひ大變な事をめつけ出した。それは焼肴が山陽の方は大きくて、自分のは小さいといふ事である。

「いかん、いかん。幾ら後客にしても、魚の小さいのは、餘り氣持がいいものではないて。」

棕隱は腹の中でかう思ひながら、何食はぬ顔で杯を手にとつた。

暫くすると、棕隱はいつに似ず眞面目な調子で山陽に話し出した。

「君、つかん事を訊くやうだが、姑蘇城外の蘇の字だがね、あれは艸冠の下の魚と禾とは、何方に書いた方がほんたうだつたかな。」

「蘇の字かい、あれは魚が右にあらうと、左にあらうと同じだよ。」

山陽は事によつたら魚の字など逆とんぼになつてゐたつて構はないやうな調子で答へた。

「さうかなあ。」棕隱は疊の上に指先でわざわざ字を書いて見た。「魚は右にあつても、左にあつても構はないんだつたかな。」

「さうさ。何だつてまたそんな事を訊くんだい。」

「實はかうしたいからなんだ。」棕隱は矢庭に箸でもつて山陽の焼肴と自分のとを取りかへた。

「ね、魚は右にあつたつて、左にあつたつて一向差支ないんだらう。」

「これは失敗つた。ははは。」山陽は聲を立てて笑つた。

吾が愛する頼山陽と世上の物識とに教へる。魚は右にあらうが、左にあらうが、早く箸を下した方が一番いいのである。

油蟲嫌ひの皇帝

油蟲といへば、蟲のなかでも一番いやな奴で、誰だつてあんな蟲を好くものはない筈だが、嫌ひなうちにも一番あの蟲が嫌ひだつたのは、外でもない露西亞のピイタア大帝であつた。

誰にしても好き嫌ひはあるもので、ゲエテは無駄話家が嫌ひだつた。シヨペンハウエルは女が嫌ひだつた。スウィフトは戸を閉めない人が嫌ひだつた。さういふ變つた毛嫌ひに比べると、

ピイタア大帝が油蟲を嫌つたのは、別段驚く程の事ではなかつた。

だが、實をいふと、露西亞には——とりわけ露西亞の田舎には油蟲が多いので、大帝が旅行でもする折には、お側の衆の氣苦勞は一通りではなかつた。何故といつて、大帝は他の家へ入る時には室をきれいに掃除させた上で、

「御覽の通り油蟲は一匹も居りませんでございます。」

といふ家來の保證がなかつたら、夢にも鬨をまたがうとはしなかつたから。

ある日の事、大帝は自分のお氣に入りの家來の別莊へお成りになつた。家來は大帝のお成りを喜んで、室をきれいに飾りつけた上、色々の献上物など並べ立てて置いたが、それがひどく氣に入つて、大帝はいつにない上機嫌の態で食卓についた。

舌觸りのいい肉汁を啜りさして、大帝はひよいと顔を持ち上げた。そして側にゐた別莊の主人に呼びかけた。

「一寸訊いておきたいが、この別莊には無論油蟲など居る筈はなからうね。」

家來は油蟲と聞いたので、またいつもの癖が始まつたなと思つた。

「はい、油蟲など居る筈はございません。とりわけ掃除には氣をつけて居りますので。」

「うむ。それは結構だ。」大帝はまた肉汁を啜り出さうとしたが、やつぱり氣になつてならぬと見えて、も一度駄目を押した。「ほんたうに一匹も居なからうな。」

「はい。」家來は叮嚀に頭を下げた。「よしんば居りましたところで、決してお目通りへ出て來るやうな事はございません。御覽遊ばせ。あれ、あのやうに生きた奴を一匹針で壁にとめて、蟲よけの蠶ひが致してございますから。」

「なに、生きた奴が針で突刺してある。」大帝は彈き飛されたやうに椅子から飛び上つた。そして主人の指さす方へ眼をやると、それは丁度自分の頭の上で、留針で刺された油蟲はびくびく手足を動かしてゐた。大帝の顔は菜つ葉のやうに青くなつた。

「この禿頭めが……」

大帝はいきなり主人の頭に拳骨を一つ喰はして、そのまま外へ飛び出した。あとに残された主人は壁の油蟲のやうに椅子の上で矢鱈に手足をもちがいてゐた。

大食と少食

廣瀬淡窓は人も知つてゐるやうに豊後日田の儒者であつた。ある時養子の青邨が淡窓に訊いた事があつた。

茶

「父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

全話集

「禮か。」淡窓はちやんと坐つた膝がしらを養子の方へ捻ぢ向けた。「禮は無遠慮から始めるのだね。」

青邨は腹のなかで養父の語を味はつてみたが、今一つはつきりと意味が解せなかつた。で、また異つた事を訊いた。

「父上、今一つ伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

「養生の極意か。」淡窓はすぐ返事をした。「何よりも先づ大喰ひをするんだな。」

青邨はいくらか調弄はれたやうな氣味で下つて往つた。

その後青邨は廣瀬旭莊に出會つた。旭莊は淡窓の弟で、青邨にとつては義理のある叔父だつた。甥はまた同じ事を訊いた。

「叔父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

旭莊は直ぐ返辭をした。

「禮かい。禮なら先づ遠慮から始めるんだね。」

青邨はいつだつたかの淡窓の答を思ひ出して、何うにも合點が往かないらしかつた。で、立續けに今一つの質問を投げ出した。

「叔父上、尋でに伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

大食と少食

旭莊は譯もなく答へた。

「養生の極意は食をひかへる事さ。」

青邨はもう我慢が出来なかつた。一方が無遠慮たと言へば、一方は遠慮たと答へるし、一方は大喰ひだと答へれば、一方は食をひかへるのだと言ふ。屹度親父と叔父貴とが馴れ合つて自分を調弄つてゐるのか、さもなければ、二人とも何も知らない喰ひぬけの大馬鹿者に相違ないと思つた。で、幾らか冷かし氣味に理由を話して訊いてみた。

「こんなわけでございますが、父上の御返事と叔父上のと、どちらが眞實なのでございませう。」

「どちらも眞實だ。」旭莊はきつと甥の顔を見つめて言った。その言葉によると、兄の淡窓は身體が弱く、食が細いので、始終遠慮勝と少食の損を知つてゐる。それとは打つて變つて、自分は健康で、いつも無遠慮と過食とから後悔する事が少くない。斯うして互に自分達の弱みを知つてゐるから、夫を汝に繰り返させまいとするからの事だといふのだ。

道德や人生觀は多くの場合胃に繋がつてゐるものだ。それが胃病だと一層つよい。

滑稽作家演説を盗する

マアク・トエンといへば、米國切つての滑稽作家で、この人の著作は日本でも方々の學校の教科書に使はれてゐ、また翻譯もかなりたくさん出來てゐる。この滑稽作家がある時政治家のデピユウ氏と同じ船に乗つて英國へ渡つたことがあつた。デピユウ氏は一八六六年ごろ駐日公

使として日本にも來たことのある人で、紐育埠頭の自由の像の除幕式には、わざ／＼選ばれてすばらしい演説をしたこともあるし、また自分の演説集をも出版してゐるしするから、饒舌家の多い米國の政治家仲間でも、演説のうまいのと諧謔好きとて聞えた男である。この二人の評判男が乗り合せてゐるといふことは、船出の始めから乗客達の噂になつてゐたが、船が海へ乗り出して一兩日すると、この二人を招んで一つ話でも聽かうぢやないかといふ相談が持ち上つた。

會はすぐに開かれた。滑稽作家と雄辯な政治家とは主賓として招かれた。主人側の肝煎り役が言葉叮嚀に二人の卓上演説を促すと、マアク・トエンはやをら起ち上つて、持前の皮肉や諧謔を取り交せて二十分ばかりしゃべつた。演説はすばらしい出來だつた。皆は手を拍つて笑ひ崩れた。そして口にくそ出さないが、こんな感興の後では、デピユウ氏のやうな場慣れた演説家でも、さぞやりにくいに相違あるまいと思つた。デピユウ氏は起ち上つた。

「御主人役を初め淑女紳士諸君……」この名代の演説家は落着き拂つた態度で口を開いた。「今日お招きにあづかつてこの席に参ります少し前、私とマアク・トエン君とは一つお互に演説を取り換つこをしてやつてみようぢやないかと申し合せをいたしました。只今マアク・トエン

君が申し上げましたのが、紛れもない私の演説でございますが、それに對して皆様から過分な御拍手をいただいて、私身に餘る光榮だと存じて居ります。さてこれからお聞きに達しますものが、實は名譽ある文學者マアク・トエン君の演説なのでございます……」

かう言つて、デピユウ氏は演説の草稿を取り出さうとするらしく、ポケットへ手をやつたが急にあはてたやうな素振を見せた。

「甚だ粗忽千萬な次第で、申し上げにくいわけでございますが、實はマアク・トエン氏からいただいてゐた演説の草稿をこの隠しに入れたまま、つひ紛失してしまひましたので、この場合何一つ申し上げることの出来ないのは、皆さまに對して、また友人に對して甚だ申譯のないこととでございます。」

かう結んで、この雄辯家は腰を下した。皆は一度にどつと笑ひ崩れた。滑稽作家はその場の模様を見て呆氣に取られて、目をばちくりさせてゐた。

次の日マアク・トエン氏が甲板を歩いてゐると、一人の英國人がつかつかと近寄つて來た。その人は昨夜の席で一番大きな聲で吹き出してゐた男だつた。

「先生、昨夜はお氣の毒でしたな。」その男はこの滑稽作家をいたはるやうに言つた。「ですが

評判と事實とは違ふもので、私はあのデピユウさんがえらい雄辯家だとはかねがね聞いてゐましたが、先生のなすつたあの人の演説を聞いてすつかり失望してしまひました。奴さん、よつぽどこが悪いやうですね。」

かう言つて、その英國人は太い指で自分の頭を指さして見せた。それを見てマアク・トエンは厭世家のやうに悲しさうな顔をした。そしてまたしても眼ばかりばちくりさせてゐた。

主人の頭を叩く女

むかしは男は月代まかやきといふものを剃つたものだが、それは髻を剃る以上に面倒くさいものであつた。伊勢の桑名に松平定綱といふ殿様があつた。氣難かしやで、思ふ存分我儘を振舞つたものだが、とりわけ月代を剃るのが嫌ひであつた。

「我君、だいぶお頭かぶが伸びましたやうでございますが……」

家來がかう言つてそれとなく催促しても、殿様は餘程氣輕な時でない、減多に月代を剃ら

うとは言ひ出さなかつた。やつと口説き落して、家來が剃刀を持って後に立つと、氣難かしやの殿様は螻蛄のやうに頭を振つてどうしても剃らさうとしなかつた。

「我君、お危うございます。」と剃刀を持ったまま泣き出しさうに家來が言ふと、殿様は尙調子に乗つて頭を振立てた。

「俺の頭はこんなにぐらぐらするのが癖だからの。」

とど終ひには、家來が粗忽をして、家來にとつて餘り大事でない殿様の頭によく傷をつけたものだ。すると、氣儘な殿様は、主人の頭に傷をつけた不屈者だといつて、すぐに立ち上りざま手打ちにしたものだ。

かうした理由で、家來の幾人か手打ちにされたので、終ひには誰一人月代を剃らうといひ出す家來はなくなつた。で、殿様の頭は荒野のやうに髪が伸び放題に伸びた。

殿様の頭が、だんだんむさくろしくなるのを見た奥方は、譯を聞いて初めて驚いた。そして其の次ぎの日には、奥方自身殿様の月代を剃らうと言ひ出した。殿様はその日も螻蛄のやうに頭を振つた。まさか剃刀傷をつけたと言つて、奥方を手打ちにする氣はなかつたらうが、この頭は剃刀の前には、ぐらぐらしないでは居られなかつたのだ。

奥方はそれを見ると、矢庭に拳をふり上げて、二つ三つ殿様の頭を叩きつけた。まるで締め弛んだ古釘を打ち直してもするやうに。殿様はびつくりした。

「何をする」

「何も致しません、あなたのお悪いお癖を直したいばかりでございます。」

奥方はそれを機に、殿様をたしなめた。殿は黙つて言ふなりになつた。

女にも色々ある。貧乏人の女房になるものは、頭を叩きつけられる辛抱さが必要だが、富豪や大名の奥方になるものは、時々主人の頭を叩きつける程の氣力が無くて叶はぬ。

一千圓の遺産處分

土耳其であつた話である。あすこの或る信心深い富豪が大病にかかつて死にかけたので、一人息子を枕もとに呼んで、遺産の始末を細々と話した。

「で、お前に残してやるものは、それで判つたらうが、ここにまだざつと千圓ばかり残つてゐ

る金がある。」

病人は苦しきさうな息使ひをしながら言った。

「はい、ございます。いかが始末したものでございませうな。この金は。」孝行者の息子は、いつその事この千圓は親父が墓場へ持つて行つてはどんなものかといひたいらしい考へを持つてゐた。

「それについてお前に頼みがあるのだが——」病人は破けた風琴のやうに悲しきやうにまた咳き入つた。「その千圓は世界中でお前が一番賤しいと思ふ人間に呉れてやつて欲しいのだ。」

「承知致しました、きつとさやうに取計らひます。」孝行息子は今更のやうに親父の慈悲ぶかにの感心して、鼻をつまらせながら返辭した。

病人が亡くなつて後、息子は裁判所へ往つて遺産相續をしたが、その折自分のために色々面倒な手續をしてくれた裁判官の顔を見ると、急に例の千圓の事を思ひ出した。

「さうだ、あの千圓をこの男に呉れてやらう。相手は裁判官だ。また後々の都合もある事だから。」孝行息子は親爺の遺言によつて、遺産のうち千圓を裁判官に進呈したいと言ひ出した。「なに、千圓くれる。そんな物は貰ふわけに往かない。」裁判官はわざわざ取つておきの嚴つべ

らしい顔をして言つた。「俺はお前の親爺と近づきでは無かつたぢやないか。見ず知らずの他人から遺産を貰ふといふ法はない。」

「いえ、貴方のものです。是非貴方にさし上げてくれと親爺がくれぐれも申し残した事なんですから。」

孝行息子は何でもかでも千圓を押し付けようとした。

「困つたな。遺言といふのであつてみれば。」裁判官は眞實困つたやうに額を手でおさへた。

「ぢや空取引をしよう。幸ひ裁判所の庭に雪がどつさり積つてゐるから、この雪を千圓でお前に賣るとしよう。ね、さうすればいいだらう、雙方の言ひ分が立つて。」

孝行息子はそれに同意して、千圓を渡して歸つた。すると、その明る朝また裁判所へ喚び出された。

「お前は昨日この構内の雪を買つたね。あんな物をいつまで置かれても迷惑だから、直ぐ引取つて貰ひたい。」

裁判官は物尺のやうな嚴正な顔をして言つた。孝行息子は呆氣にとられたが、さてどうする事も出来なかつた。

「雪を引取る事は出来ないといふか。」裁判官は言つた。

「それぢや、契約違反の賠償として二百圓の料金を命ずる。」

孝行息子はべそをかきさうな口もとをしたが、それでも黙つて二百圓を拂つて外へ出た。そしてふと親爺の遺言を思ひ出した。

「さうだ、親爺さんは世界中の一番賤しい男にくれてやれと言つたつげが。まあ、よかつた、これで遺言通りにしたといふもんだ。」

獨身主義者と結婚

今度の歐洲戦争で哀れな犠牲者となつた英國のキツチナア元帥が、名高い獨身主義者だつたのは誰もが知つてゐる通りだ。女嫌ひな獨身主義者にとつて、キツチナアを亡くしたのは、世界を半分失つたのと同じ程の損失だつたに相違ない。

キツチナアがまだ印度に居た頃、その下で副官を勤めてゐた或る若い將校が、今度結婚した

いから、暫くの間休暇を貰つて、本國英吉利に還へらせて貰ひたいと言ひ出した。女嫌ひな元帥は結婚だと聞くと額にさつと皺を寄せたが、それでも談話のすむまではじつと辛抱してゐた。

「結婚するつて。でも、お前はまだ二十五にもならんぢやないか。一年待ちなさい。そして其の上でまだ結婚したかつたら、休暇を與へる事にしようから。」

元帥はかう言つて、若い將校の玉葱のやうな蒼白い顔を見た。將校はふくれつ面をしたが、それでも言葉はかへさなかつた。

一年は過ぎた。若い將校は、キツチナアが上機嫌な折を見計つて、また以前の賜暇問題を持ち出した。

すると、キツチナアの石のやうな四角い、そしてまた石のやうな嚴肅な顔に、急に石のやうな冷たさが現はれて來た。

「十二箇月考へぬいても、お前はまだ結婚したいつて言ふんだね。」

「はい、早く身を固めた方がいいかと思ひまして。」

若い將校は、腹の減つた狗が主人の顔を見る折のやうな狡さうな眼つきをした。

「それぢや仕方がない。休暇を取るのもよからう」この名高い獨身主義者は忌々しさうに白い

齒を見せながら言つた。「相手は女ぢやないか、それに一年も續いて愛情をもつてゐるなんて。俺はそんな男がこの世にあらうとは思はなかつたよ。」

若い將校は希望通りに休暇を貰つたらしいので、加之に好きな娘と結婚する事さへ出来たらいいので、別に氣むつかしやの元帥と議論する必要もなかつたのだ。で、お辭儀をして室から外に出ようとしたが、それだけでは何だか物足りないやうに思つたので、つかつかと後がへりをして來た。

「申し添へておきますが、私が結婚しますのは、去年のと同じ女ではございませんから。」

キツチナアはだしぬけに耳朶を引張られたやうな顔をした。——若い將校め、何といふ不作法な事を言つたものか。こんなのに限つて、一度は女の前でとんぼがへりをする奴である。

雄辯家の親孝行

親孝行にも色々ある。支那の實行家（親孝行にも理論家と實際家との二通りがある。）の爲て來た行跡を見ても、寒中に筍を掘つたり、裸で張りつめた氷の上に寝たり、いろいろ變つた型がある。

米國民主黨の領袖ブライアン氏が、いつだつたか、自分の出る演說會場へ、たつた一人しかない大切の母親を引張つて往つた事があつた。この名高い演說家の考へでは、廣い會場で、大勢の聽衆の前で、自分の息子が瀧のやうな雄辯を揮つてゐるのを見るのは、老年の母にとつてどんなにか嬉しからう。かうして自分は聽衆を教育する上に、母親をも慰める事が出来る。こんな結構な方法が外にあるものではないと、ブライアン氏はしみじみ自分の口達者なのを嬉しく思つた。

ブライアン氏は演壇に立つた。そして雷のやうな聽衆の喝采を浴びながら、得意のお喋舌をし續けた。演說はいつものよりもずつと長かつた。老いた母親が聽いてゐると思へば、演說もいい加減の事は云へなかつた。で、少しは母親の好きな砂糖や嘘を混ぜて、顔中を眞紅にして喚き散らした。

演說がやつと濟むと、ブライアン氏は額の汗を拭き拭き、母親の傍へやつて來た。

「阿母さん。どうでした。巧かつたでせう。」

「さうですね。かなり出来たやうだつたよ。母親は睡むさうな眼をくしゃくしゃさせながら言つた。

「あなたのお氣に召すやうに今日は特別に長くやつたのですよ。」ブライアン氏は鼻先の汗を拭き忘れて言つた。

「さうかい。それであんなに長かつたのかい。」母親は悲しさうに言つた。「それぢや、三分の一位に切りつめておくれだつたなら、もつと阿母さんは喜んだらうよ。」

裸體

むかし、江戸に龜田鵬齋といふ學者が居た。貧しい學者にしても夏はやはり金持同様に暑かつたから、鵬齋はいつも六月になると、ずつと眞つ裸體で暮してゐた。その鵬齋に何とかいふ小娘があつたが、その小娘もたつた一枚きりの單物を汚して、母親に洗濯して貰ふ間は、いつも裸體で待つてゐたといふ事だ。

ある時、鵬齋が知合の饗應に招かれた事があつた。丁度夏初めで、鵬齋は別に着代を持つてゐなかつたから、着古しの單物のまんま出掛けて行つた。

むかし頼春水は、貧乏なところから羽織といつては、いつも白木綿を裁つて着てゐた。ある時、仲よしの菅茶山がそれを見て、随分古い羽織だといつて、

いつ見ても變らぬ色の羽織かな

と、一句詠んで冷かした事があつた。すると、負けぬ氣の春水は、すぐ篋刀返しに

お前の袴いく代經ぬらん

と後の句を繼いだ。茶山は驚いて今更のやうに自分の袴を見た。袴は十年來着古した古い物だつた。鵬齋の着物がこんなに古かつたかどうかは知らないが、あまり負けは取らなかつたに相違なかつた。

夜が更けて、鵬齋はのつそりと歸つて來た。女房が玄關まで出迎へて見ると、この學者は眞つ裸のまま黙つてそこに衝つ立つてゐた。

「まあ、あなた、どうなすつたの。」女房は驚いて口を開いた。「すつ裸ぢやありませんか。」

「うむ、御覽の通り裸だ。」鵬齋は熟柿臭い息をついた。

「そんな姿をして人通りのなかをお歸りになりましたの。」
「うむ、歸つて来たよ。」

學者の女房は、誰でも平素から辛抱強くしつけられてゐるものだが、それでもどうかすると、蠅螂のやうに癩癩を起し兼ねないものだ。鵬齋の女房は屹となつた。

「歸つて来たよもないもんですよ。一體着物はどうなすつたの。」

「道へ捨てて来たよ。」鵬齋は頸鬚の伸びた頤をあんぐりあけて大きな欠伸をした。「酔つ拂つて溝へ陥つたもんだでの。」

「溝へおつこつたつて、着物まで捨てなくつてもよささうなもんぢやありませんか。」

女房は鵬齋の單物と一緒にくたに、自分の櫛も、筓も貞操も投げ捨てられたやうに艶つとなつて口を尖らした。

「だがの……」鵬齋は素直に言譯をするらしく言つた。「着物がべとべとに汚れて、臭くつて仕様がなないもんだでの。」

「臭くつたつて……」女房はどんな臭いものでも、まだ貧乏よりはましたといふ事をよく知つてゐた。「明日からは、もうお召しになるものがないぢやありませんか。」

「着る物がなかつたら裸體であるさ。」

鵬齋は片手を伸して、脊骨の邊りをぼりぼり掻きながら言つた。身體中にどことなく臭い匂ひがした。「乃公だつて裸體で生れて来た人間なんだからな。」

「それもよござんせう。」

女房はぶりぶりしながら言つた。鵬齋がそれから幾日間裸體で通したかは私も知らない。

貧乏畫家

むかし、渡邊華山の弟子に櫻間青崖といふ畫家が居た。貧乏人の多いむかしの畫家の中でも、これはまたずば抜けた貧乏人で、住居といつては、僅に胡坐が組まれる程の小さな家で、雨が降る日にはいつも雨漏りがして仕方がなかつた。そんな折には、青崖はいつも左の手で雨傘をさしながら、右の手ではせつせと繪を描いてゐた。そんなに雨漏がする疊の上で何も繪など描かなくともよささうなものだ、じつと腕を拱んで、考へ事でもしてゐたらよかりさうなものだ。

のだが、貧乏な畫家には考へ物などは禁物であつたので、青崖は雨傘をさしながらせつせと繪を描いた。

或る夏の日の事であつた。華山の弟子の一人、椿山といふ男が青崖を訪ねて來た。すると表の戸がびたりと閉つて居るので、椿山は外から大きな聲で喚いた。

「櫻間先生、先生はおいてはございませんか。」

暫くすると、中から掠めたやうな男聲で、

「先生は今日はお留守ですよ。」

茶話

全

集

と言ふものがあつた。椿山は平素から青崖の宅には主人の他、猫の子一匹居ないのを知つて居るので、主人の留守に誰かうけたまへ應答をするものがあるのを不思議に思つた。さう思へば今の聲がどうやら青崖自身のに似て居るやうに思はれてならなかつた。

椿山は又聲をかけた。

「先生は何方どちうにいらつしやいました。」

「何方へ行つたか、そんな事が判つてたままるものか。」

家の中からは、大きな聲で叱りつけるやうに怒鳴つた。それこそ擬ふ方のない青崖自身の聲であつた。

「さう仰有るのは、先生御自身ぢやございませんか。」

椿山はさう言ひながら破けた障子の隙間からなかを覗いて見た。そこには青崖が素裸の儘胡坐をかいて居たが、名前を呼びかけられたので、つひのそのそと起ち上つて來た。

「俺さ、俺には違ひないが、今一寸他人に入られては困るんてね。」青崖はかう言ひながら障子の側まで歩いて來た。「表に洗濯物の單衣が干してあるんだが、もう乾いたかしら……氣の毒だが一寸觸つて見てくれないか。」

乏

畫

家

椿山は表の井戸端を見た。成程其處には洗濯物が一枚、物干竿に引かかつて居たが、どんなお心の潤いおてんたう様でも、顔を顰めないでは見て居られないやうな單衣物であつた。椿山は一寸手に觸つて見た。單衣物はどうにか乾いて居た。

「先生、乾いて居ますよ。」

「乾いて居るか、それはいい。そんなら俺も留守ぢやない。」青崖はかういひながら戸を心持開けて、中から顔を出した。「氣の毒だが序に一寸それをとつてくれないか。」

椿山は言はれる儘に洗濯物をとつた。青崖は安心したやうに戸を押し開けて外へ出た。見る

と肌には何も着けて居なかつた。椿山は自分の方が顔が赤くなるやうな氣持で、脊後からすばりと洗濯物を着せかけた。青崖は安心したやうに聲を揚げて笑つた。

音楽家と小説家

波蘭共和國の今の大統領。パデレウスキイが、秀れた洋琴家である事は知らぬ人もあるまい。大統領にならぬ前、この人はよく米國へ渡つて演奏會を開いたものだが、ある時何かの會合で、文豪ジャツク・ロンドンに會つた。

ジャツク・ロンドンといへば、名高い「野性の聲」で狗や狼の生活をかいた作家で、原始的生活が好き余りから、自分でも焼肉の代りに、血だらけな生の肉を嚙つたり、取り立ての蝸牛をその儘飲みにしたりした男だ。

小説家は髪の毛の長いこの音楽家を見ると口をきつた。

「パデレウスキイさん、洋琴つてなかなか好いものですね。私も大好きです。」

「ほほう、結構ですな。」

パデレウスキイは、外に掛け替へのない大切な指を膝の上で組み合はせながら言つた。「貴君は文化的な生活はお嫌ひのやうに承はつてみましたから、實は洋琴の方も餘りお好きではないかしらと思つてみました。」

「いや、どうして、洋琴は大好きでさ。」小説家はこれまでにいろんな荒仕事をして來たらしい、巖丈な兩肩を揺ぶりながら笑つた。「かう見えても、私は洋琴のお蔭で露命を繋いだことがあるんですからね。」

「洋琴で？　してみると、貴方もお弾きになるんですか。」

パデレウスキイは洋琴を弾く狼にでも出會つたやうに、眼を大きく睜つて相手の顔を見た。

「いや、弾きません。だが、眞實の事をいふとかうなんです。」小説家は血だらけな牛の肉を噛み馴れた口もとを子供のやうに窄めながら言つた。「私の父はミスツピイで農園をやつてゐましたが、ある時洪水ですつかり臺なしにされてしまひ、加之に私達の住家も根こそぎ持つて往かれました。」

「ほほう、夫はお氣の毒でしたな。」パデレウスキイ氏は心から氣の毒さうに言つた。そして小

説家も音楽家と同じやうに、餘りいい月日の下には生れ合はさなかつたものだなといったやうな表情をした。

小説家は言葉を次いだ。「その折親父は卓子の上に乗つて逃げましたが、私は洋琴につかまつてやつと生命拾ひをしたやうな始末なんて。」

蓮のうてな

英吉利のグラスゴウにドナルドソンといふお爺さんがあつた。老病で死にかかつた時、枕もとに媼さんと呼んで言つた。

「媼さんや、お前にはいかいお世話になつたの。俺も今度こそはいよいよお迎ひが來たと思ふから、どうせ往かんなるまいが、氣の毒なのは後に残つたお前の身體ぢやてのう。」

「何を言はつしやるだ、後の事など心配せんと……。」媼さんは悲しさが胸に一杯になつて來る様に思つた「氣をのんびりと持つてゐざつしやれ、病は氣一つぢやといふ程にな。」

「氣安めは言はん事ぢや。」爺さんは枯枝のやうな手を胸さきで揮つた。

「ところで、媼さんや。後に残つたお前の身體ぢやがのう。一人暮しも辛からうから、俺に遠慮は要らん事ぢや、いい先があつたら片づいての、老先を氣樂に暮らす工夫をせんならんぞ。」

「滅相な事言はつしやるな。」媼さんは貞操のかたい蟋蟀のやうな悲しさうな聲で泣いた。「今さら外へかたづくなどと、そないな事したら、俺らあの世で二人御亭主を持つ事になりますだ。」

夫を聞くと、病人の爺さんは急に黙つてしまつた。そして吹鞆のやうな音をさせて、すうと深い溜息をついた。爺さんの考では、亡くなつて後の此の世では兎も角も、あの世で、媼さんが自分より外に今一人の亭主を持つてゐる事は、とても辛抱出來なかつた。出來る事なら、媼さんにどつさり遺産を残して、きれいに寡婦ごけを通させたかつたが、別に怠けたわけでもないのに、どうしたものか爺さんには大して遺産といふ程の物も無かつた。爺さんは空洞くうどうのやうな眼をしてじつと考へ込んでゐたが、ふとい事を思ひついたので、急に顔中が明るくなつた。

「媼さんや、いい人があるわい。お前も知つての那のジョン・クレメンズ爺さんな、あの人がいいわい。あれは人間が親切な上に、神信心しないさうぢやから、お前が片づくのに誂へ向き

といふものぢやて。」

「何故の。」媼さんはげんさうな顔をした。

「考へてみさつしやれ、俺とお前とはあの世で一緒にはなれようが、不信心者のクレメンス爺さんが、天國へ上つて來られよう筈がないからの。」

「なる程な：」媼さんはそれを聞いて道理至極な事のやうに思つた。それにつけても、そんな道理至極な事を思ひつく爺さんと別れるのは悲しくてならなかつた。だから媼さんは蟋蟀のやうに身をふるはして泣いた。

文豪と旅宿の亭主

英國の文豪キプリングの邸前に美しい並木があつて、主人が自慢の一つになつてゐる。ところが、この頃になつて急に樹に元氣がなくなつたので、何うした事かとよく調べて見ると、隣の旅籠屋へ出入する馬車の故で、車の肩が突き當る度に樹肌が擦りむけてゐたのだと判つた。

キプリングはぶつぶつ呟きながら、隣の主人あてにこれからは少し氣をつけてくれるやうにと手紙を書いて出した。旅籠屋の亭主はそれを受取ると、すぐ自分の家に泊り合はせてゐる客の一人をたづねた。

「旦那、あなたはキプリング先生の書いた物をお購ひになりませんか。あの先生の物は滅多に手に入らないつていふ事でがすぜ。」

「キプリングさんの手蹟かい。」客は聲をはづませた。「有るなら譲つて貰ひたいもんだね。かねがね欲しいと思つてたんだ。」

「ぢや、お譲りませう、やつと今手に入つたところだがさ。」

旅籠屋の亭主は、たつた今受取つたばかりの文豪の手紙を賣りつけた。そして代りに十シリングの銀貨を受取つた。

文豪は隣家から一向返事が來ないので、眞紅になつて怒つた。そして今度は火のやうな手紙を書いて送つた。

旅籠屋の亭主は、その手紙をまた泊り客の一人に賣りつけた。そして一磅の金を黙つてポケットにしまひ込んでしまつた。

キプリングは幾日経つても返事が来ないので、たうとう業を煮やして隣へ出かけて往つた。「御主人、お前さんのところへ、こなひだから二度ばかり手紙を出しておいたが、受取つてくれませんか。」

「はい、確に拜見しましたよ。」

旅籠屋の亭主は、銀貨をポケットにしまひ込んだ、その同じ手で頤を撫てまはした。

「ぢや、何だつて返事をくれない。」文豪はぶりぶりして言つた。

「でも、先生、私の方では毎日でもお手紙が頂きたいんです。」

隣の亭主は揉み手をしながらお辭儀をした。

「馬車でお客を送るよか、その方がずつと商賣になるもんですからな。」

毬を返せ

一七四〇年、獨逸聯邦が騒いだ。そのどさくさ紛れに、普魯西のフレデリック大王は、シレ

イジャの土地を、奥太利の女帝マリア・テレサの柔かい手から引つ手繰つた事があつた。ちやうど其頃、フレデリック王が自分の部屋で何か頻りに書き物をしてゐると、ふだん可愛がつてゐる甥の一人が入つて来て、卓子の側で毬投げを始めたものだ。

英國の詩人テニソンは、自分が詩作に夢中になつてゐる時、女中がばたばた足音を立てて入つたからといつて、急に癩癩を起して、インキ壺を投げつけたといふ事だが、フレデリック大王は詩人よりは幾らか辛抱強かつたと見えて、そんななかに平氣で書き物をしてゐるが、どうした機みか、甥の投げた毬が間違つて王の凭りかかつてゐる卓子の上に落ちて來た。王は一寸ペンを止めて、毬の方へ目を逸らしたが、指先でそれを押しのけると、黙つてまた書き物を續けた。

と、間もなく毬はまた卓子の上に落ちて來た。そして道德家のやうに四角い顔をしてゐるインキ壺に戯けかかつた。王はそれを押へて、甥の方へ投げかへしてやつたが、その途端、白い眼をしてちらと睨んでみせた。甥は一寸お辭儀をした。

「叔父さん、御免なさい、これから氣をつけますから。」

暫くすると、毬はまた卓子の上に落ちて來た。そして普魯西の英雄にからかひでもするやう

に二三度王の鼻つ先きでびよんびよんと躍つてみせた。王はやにはに夫を引つ摑んで、自分の隠しの底へつつ込んでしまつた。甥はそれを見ると、濟まなさうに擦り寄つて來た。

「叔父さん、御免なさい。僕お詫をしますから、毬を返して下さい。」

叔父は氣むつかしい顔をして、せつせと書き物をしてゐたが、どうしても毬を取り出さうとしなかつた。

甥はいつまでもねだつてはゐなかつた。暫くすると、思ひ切つた顔をして王の前に立つた。そしてきつぱりした調子で言つた。

「叔父さま、あなたにお伺ひしますが、毬はお返し下さるんですか、下さらないんですか。」

叔父はぎよつとした氣味で、小さな甥を振向いてみた。そして涙ぐんだ眼のうちに、王であらうが、誰であらうが、許すまじき力を見てとつた。王は急に顔色を和げて、隠しから毬を取出してくれた。

「うい奴ぢやのう、毬は返してくれるぞ。其方が居るうちは、シレイジヤも先づ安心だといふものぢや。」



五千弗の提琴

いつだつたか大阪に來た事のある露西亞の提琴弾きピアストロは、十萬圓の提琴を持つてゐるといふので名高かつた。十萬圓の現金をもつてゐるといふのに比べると、それだけの提琴を持つてゐるといふのは、何だか一寸奥ゆかしい點が無いでもない。

ピアストロの夫とは比べ物にならないが、ヴィテリイといふ名高い提琴家も、五千弗の提琴をもつてゐるので名高かつた。ある時オウシヨン・グロオヴで、その提琴で演奏會を開くことになつた。値の高い樂器からは、美しい音がするものだと思ひ込んでゐるらしい音樂好きは、その日になると吾れ勝ちに會場へ押しかけて來た。

暫くすると、この名高い提琴家は、客の前に現れた。そして弓を取りあげると勢よく弾き出した。その音といつたら美しい女の啜り泣きをするやうな調子で、聽衆は誰一人今日までこんな美しい音樂を耳にした事はないらしかつた。

「さすが五千弗の提琴程あつて、何とも言へませんな。」
勘定高い聴衆の誰彼は、弓のさきから、金貨が一つ宛零れおちるやうに思つて、腹の底から揺り動かされた。

暫くすると、この提琴家はたと弓の手を止めた。そして樂器に何か故障でも起きたらしく幾度か調子を直さうとしてゐたが、何うも思ふやうにならないので、急に痲癢を起した。そして樂器を手に取り直したと思ふと、暴に椅子の背に叩きつけた。樂器は女に騙された男の心の臓のやうにこなこなになつて碎けてしまつた。

聴衆は越瓜のやうに眞つ青になつて顫へた。亂暴な音樂家もあつたものだとい鳴りちらしてゐる男もあつた。美しい娘をもつた母親は、どんな事があつても音樂家になぞ娘は呉れてやるまい。さもないと、どうかすると、朝の珈琲がうまくないからと言つて、娘を椅子の背に叩きつけないものでもないと思つたらしかつた。

すると、司會者が現れた。そして騒ぎ立てる聴衆を制しながら、諸君は眞つ青になつてお驚きのやうだが、今毀したのは五千弗の提琴ぢやない、實は一弗六十五仙の安物に過ぎない。これからお聴に達するのが、名高い例の提琴であると斷りを言つた。

聴衆は聲をたてて笑ひ出した。だが、音樂家が弓を取ると、すぐに鎖まりかへつて耳をすました。成程結構な演奏ではあるが、さうかといつて、一弗六十五仙の先刻の提琴と比べて、音色に格別の異ひはなかつた。それにつけても聴衆は思つた。音樂のいい悪いは樂器の故ぢやなくて、音樂家の腕である。

日本の音樂家が五千弗の樂器を持たないのは聴衆にとつて幸福である。そしてもつと幸福なのは、そんないたづらをする程音樂家の腕が冴えてゐない事である。

劇作者と舞臺監督

日本の芝居では、近頃見物がこれまでの出し物に飽きて來たところから、頻りと新作を歓迎して書きおろし物とさへいへば、どんな拙いものでも板に上せてゐるので、一つ二つ自分の作が演ぜられると、もういつぱしの劇作家か何ぞのやうに氣取つたものの言ひ様をする新作家が、そこらにちよいちよい見つかるやうになつた。ほんたうにめでたいことである。

それとは違つて、これは亞米利加の話であるが、あちらにダビッド・ベラスコといふ舞臺監督がある。ある日豫て見知り越しの男が訪ねて來たので、舞臺監督はきさくに會つてみた。その男は言つた。

「私の友人のスミスといふ男が、こなひだ三幕物の喜劇を御覽に入れた筈ですが……」

「ええ、そんな事がありました。あの方があなたのお友達でしたか。」

舞臺監督は上等の葉巻を吹かしながら言つた。

「その喜劇は一昨晚でしたか、あの方に本讀みしていただきました。承はつたのは私と俳優二人の都合三人でしたつけ。」

「本讀みの結果はどうでした。お氣に召しましたか。」

お客は氣づかはしさうに相手の顔を見た。これまで數へ切れないほど度々そんな眼つきで顔を見られた事のある舞臺監督は、こんな場合にはどうしたらいいかといふことをよく知つてゐた。それはしきりと葉巻の煙を吹かしながら、せいぜいかけかまひのない顔をしてゐればいいといふことだ。

「お氣に召しましたか知ら。」客は言ひにくさうに言つた。

「正直にいふと……」舞臺監督は強て正直らしい口もとをした。「私達三人の意見は、あのかで一幕は無駄だといふ事に一致してゐました。」

「はあ、さうでしたか。して、どの幕が無駄だとお考へになりました。」

その男は舞臺監督の氣になつて、板に上すことが出来るのだつたら、友達作者に勧め、一幕位はどんなにでもして刈りこましてもいいと考へてゐるらしかつた。

「どの幕つておつしやるのですか……」舞臺監督は氣の毒さうに言つた。「ところが私達の無駄だといふ幕は、三人が三人とも異つてゐるんですからね。」

文豪の原稿

紀州に光明寺といふ黄檗の寺がある。その開山は圓通といふ草書に巧な坊さんだつた。ある人がこの坊さんから手紙を貰つたが、どうしても讀み下しにくい箇所があるので、わざわざ光明寺を訪ねて、和尚にその手紙を見せたものだ。すると、和尚は幾度か繰かへしてその手紙

を讀んでゐたが、たうとう投げ出すやうに、

「わしが書いたには相違ないが、どうにも讀み下しやうがないわい。幸ひ弟子にわしの書いたものをよく讀みわけるのであるによつて、そいつに見せたがよからう。」

と言つたさうだ。こんな風に自分で自分の書いたものが讀めないのも多くはなからうが、トルストイの原稿なども、夫人の外には讀みこなす人が少く、印刷所の植字工などの手にはとてもおへなかつたので、この人の原稿はすつかり夫人の手で書き直されたといふことだ。

茶話全集
「紅文字」の著者ホウソルンも、ずる分わからない文字を書いた人で、この人の遺稿にはかなり價值のあるものも遺つてゐるが、それが今だに出版せられないのは、誰一人十分讀みこなせる人が居ないからださうだ。

カアライルも名高い悪筆家で、この人の原稿にはどんな植字工も困らされたものだ。ある時倫敦の印刷屋が蘇格蘭からすてきに腕の優れてゐる植字工を一人よんで來た。仕事始めに職工の手に渡されたのは、外でもないカアライルの原稿だつた。すると、それを一目見た職工はうなされるやうな聲を出した。

「また此奴こいつに出會はしたんだな。」職工はいきなりその原稿を卓子の上に叩きつけた。「此奴から逃げ出したいばかりに、わざわざ倫敦下りまで出掛けて來た俺ぢやないか。」

御寢間の埃

佛蘭西のルイ十五世の皇后が、ある時ふだん自分のあまり使つたことのない公式用の寢臺の上に、小さな埃を見つけたことがあつた。皇后は一寸美しい眉を寄せた。時を移さず皇后宮大夫は御前に呼び出された。皇后は黙つて可愛らしい指でその埃を指ざして見せた。皇后宮大夫は二三度お辭儀をしたと思ふと、次に控へた皇后宮附の御寢間係を呼出した。御寢間係はその埃を見ると、顔を眞赤にしてそのまま御前を下つて行つたが、一時間程経つと國王附の御寢間係を連れてまたはひつて來た。そして御寢間の上に残つてゐる件の埃を見せて、一刻も早く取りのけた方がいいと權柄づくに言渡した。國王附の御寢間係は頭を横にふつた。

「そんなことは私の仕事ぢやありません。私は職責として皇后の宮の御ふだん用の御寢間こそ手にかけてゐますが、公式用の方は私がお觸り申すことすら出來ないことになつてゐるのです

から、この始末はどなたか外の方ではありませんと……」

皇后の宮はその言葉に一應道理があるやうに思はれたので、誰が係なのか、それをよく吟味して、その者に件の埃の始末をさせるやうにと仰せられた。その後係の者を調べるためにいろんな會議が開かれて、二月ほどむだな月日が経つた。皇后の宮は大夫を召出されて、埃はどうなつたかと訊かれた。大夫は叮嚀にお辭儀をした。

茶 「申譯がございません。引續きかれこれ詮議は致して居りますが、まだ係の者が判り兼ますので、埃はそのまま差し置いてございますやうな次第で……」

全 話 集 たらうと皇后の宮は、ある朝御自分で刷毛をもつてその埃を拂ひ落された。埃はすぐに見えなくなつた。

時計

小説家のS氏は文學者に似合はない立派な時計をもつてゐる。英國のベネット製の懐中時計

で側はニツケルだが、機械のいい、時間の正しい事にかけては一寸類がない。S氏自身の言葉によると、日本にたつた四つしか無いといふ大切な代物である。

時 この時計がS氏に不都合だといつて、腹を立ててはいけない。不都合だといふのは値段が高いからいふのではなく、時間がそんなに正しいのをいふのである。S氏が汽車の車掌か、測候所の技師であるならば兎も角も、小説家であつてみると、ちよいちよい時間の遅れる時計を持つてゐた方が、萬事につけて都合がよささうなものだ。

計 そのS氏が、あるとき友達と一緒に電車に乗つた事があつた。車が日比谷まで來ると、車掌は乗換切符に鉄を入れようとして、自分の腕時計を見た。すると安物の腕時計はいつのまにか兩手をひろげてとまつてゐた。

「これはいかに、時計が止まつてゐる。」車掌は呟きながら車中のお客を見まはした。「どなたか時間を教へていただけませんか。」

「時間か」S氏は帯の間から自慢の懐中時計を引張り出した。S氏の考へでは、成るべくなら日本にある時計といふ時計を、自分の有つてゐるベネット製の上等時計に合はせておきたかつたのだから、それにはこんな恰好な機會はなかつた。「ちやうど十二時に五分前だよ。」

「有難うございます。」車掌は禮を言ひ言ひ針を直さうとすると、S氏と同じやうにポケットから、時計を取り出して時間を見てゐた批評家の友人は横つちよから口を出した。

「をかしいな、僕のは十二時に五分過ぎだぜ。」

「へえ、十二時に五分過ぎ。」車掌はどつちに従つたものかと一寸途方に迷つたらしかつたが、ひよいとS氏のニツケル側と友人の金側とが目に入ると、初めて判断がついたやうに金側時計の持主の方に向き直つた。「あなた、十二時に五分過ぎだと仰有いましたね。有り難うございました。」

車掌は安心して腕時計の針を十二時五分過ぎに直した。

「あれだから困る。世間のわからずやといふ者は、機械を見ないで、ぢきに外側だけで、善い悪いを判断するものだから。」

S氏は獨り語を言ひながらにやりと笑つた。

S氏に告げる。世間はまあそんなもので、もしか世間の人達が、S氏の時計が、日本に四つしかない事を知つて、皆が皆立停つて時間を聞いたら、S氏もつくづく好い時計を持つた事を後悔するに相違なからう。

牧師の悪妻

親鸞聖人の室玉日姫のむかしは別だが、今の世には僧侶や牧師の女房にろくな女は見つからないやうだ。アメリカのメソヂスト派の牧師にバツクレエ博士といふ爺さんがある。この爺さんがある時南合衆國の方へお説教に往つて、そこにある亞米利加印度人のある教會で信仰談話會に列したことがあつた。

すると、一人の色の黒い女が眞先に立つてお話を初めた。女は厚い唇から唾を飛ばしながら、宗教は私のやうな見るかげもないものにまで光を與へて下すつた。慰めを與へて下すつた。安心を與へて下すつた。そして又家庭に平和を與へて下すつたといひ出した。そのまま黙つて聞いてゐたら、女は郵便切手や銀行の小切手のやうなくだらぬものまで神様にねだり兼ねないやうに思はれたので、博士は兩手で押へつけるやうにして、横から口を出した。

「奥さん、それは御結構なことですが、實際方面では如何ですか。あなたの宗教は御主人への御飯仕度に多少とも効能がございましたか。御主人はあなたが宗教をお信じになつてか

ら、ずつと幸福でいらつしやいますかしら。それから……」

バックレエ博士がなほも言葉をつがうとすると、だしぬけに誰とも知らず横から腰のあたりをつくものがあるので、博士は後を振向いて見た。すると、そこには色の黒い土地の牧師が遠慮さうに首をすくめて縮こまつてゐた。

「先生、どうぞ御質問はそのくらゐにして頂きたいものです。實はあの女は手前の女房でございますので……」

さすがの博士もそれを聞くと、苦笑ひするより外に仕方がなかつた。なぜといつて、その牧師は女房のこしらへてくれる御飯だつたら、どんなものにも舌鼓を打ちさうな顔をしてゐたから。

短い大演説

亞米利加の前大統領ウキルソン氏は名だたる雄辯家だが、いつだつたか演説について話しを

して、

「一時間位の長さの演説だつたら、即座に出来る。二十分程のものだつたら、二時間の準備が要る。もしか五分間演説だつたら、一日一晩の支度がなくつちや。」

と言つたことがあつた。實際演説といふものは、短ければ短いほど骨が折れるものだ。

その短い演説を誰よりも巧にやりおほせたといつて、ある時それを自分の女房に自慢した男があつた。それは Joseph Choate といふ亞米利加の法律家出の外交官であつた。

「短い演説は難かしいものだ、むかしから言ひ傳へられたものだが、俺はずつと以前ほんたうに短い演説で、すばらしく立派なのをやつたことがあつた。演説はたしかに大受だつたよ。」
といつて、この外交官は眼鏡越しに夫人の顔を見た。夫人はせつせと編物をしながら、おつきあひらしく返事をした。

「さう、それは結構だつたのね。そして聴衆は幾人位あつたの。」

「聴衆かい。」外交官は胡散さうに頷の圍りを撫て廻した。「聴衆はたつた一人だつたよ。」

「え、たつた一人……」夫人は編物の手を止めて夫の顔を見た。「そしてその一人はどんな方だつたの。」

「若い、美しい女だつたよ。」

外交官はわざと落着き拂つて言つた。

「まあ、若い女の方。どんなお話しをなすつたの。」

夫人は險しい目附をして夫を見た。もしか夫の顔のどこかに綻びでもあつたら、すぐに編針でもつてつづくりでもしさうな權幕であつた。夫人の膝からは毛糸の玉が小猫のやうに轉がり出した。

茶話

「私は貴女を愛します。と言つただけだつたよ、話しは。」

全集

「まあ、そんなこと言つたの。そしてその方今どこにいらつしやるの。」

集

「今ここにいらつしやるよ。」外交官は節節の高い指で皺くちやな夫人の顔を撫て廻した。「演説はたしかに大受けだつたね。」

「ふ、ふ、ふ……」

夫人は目を細めて、猫のやうに咽喉をころころさせてゐた。

自動車王と子供

米國の次期の大統領選挙に共和黨の一候補者として、ミシガン州のデアボーン俱樂部から推されてゐるのは、人も知る自動車王のヘンリー・フォウドである。その自動車王が昨年だつたか、夏の真中に友達のいくたりかと一緒に、自分の持地である華盛頓州のある森へ野宿に出かけたことがあつた。森に着くと、自動車王はすぐにシャツ一枚になつた。

「これから薪の用意をしなくつちや。」

かういつて、自動車王は鋸を持つて木立のなかへ駆け出して行つた。すると、先刻から一行を出迎へに來てゐた、自動車王の持地の隣に住んでゐるリイといふ男の小忰も、後を追うて森の茂みに姿を隠した。

二人は一緒になつて、そこらの木を伐り倒して、それを薪に挽いた。自動車王は少し挽き疲れたので、あたりの切株に腰を下した。そして掌面にへばりついた鋸屑の儘で、額の汗を押し

拭つた。

「お隣りの坊ちゃん……」自動車王は傍でせつせと薪を挽いてゐるリイの悴に話しかけた。「坊ちゃんは何知つてるのかい。君が今一緒に薪を挽いてるのが、米國切つての自動車王ヘンリー・フォウドさんだつてことをさ。」

それを聞くと、隣りの小悴は急に鋸をやめて、猿のやうに小ざかしく顔をふり向けた。そして自分の傍に立つてゐるのは、自動車王だらうが、白樺の木だらうが、そんなことはどうでもいいと言つた風に返事をした。

「フォウドさん。そんなあなたも御存じなのですかい。ここで今一緒に薪を挽いてゐるのがリイさんの御息だつてことをさ。」

自動車王は鋸の腹で横面を張り飛ばされたやうに思つた。

そんな話しを今一つしよう。——歐洲戦争の前、亞米利加生れの若い女が獨逸へ旅行して、ある機會に前の皇太子に會つたことがあつた。皇太子は立派な宮殿のなかを方方案内し廻つた末、ホオヘンツォルレン家の御先祖の肖像がづらりと並んだある室にはひりながら言つた。「貴女のやうな亞米利加生れの方には、一寸合點がゆき兼ねるでせう。私は自分の先祖調べを

して、二十六代まで調べ上げることが出来るんですからね。」

亞米利加女は女猿のやうに白い齒をむき出した。

「それは御結構ですね。ですが、そんなこと以外に、あなた何がお出来るになるの。」

獨逸帝國の豫言

乾坤一擲の大賭博を打つた獨逸皇帝の祖父が、ウイルレム一世である位の事は知らぬ人もあるまい。この人がまだ普魯西王フレデリキ・ウイルレム四世の皇弟であつた一八四九年のある秋の日、御微行でライン河の河つ縁をぶらぶらしてゐた事があつた。佛蘭西の二月革命から飛火した伯林暴動に對するその態度が善くなかつたといつて、ウイルレムは方方から盛んに不評判を浴びせられてゐた頃で、自分の運命にいつかまた芽が吹かうかなどとは、夢にも思つてゐなかつたので、暗い顔をして黄ばんだ森影を歩いてゐた。

そこへひよつくり顔を出したのは、ジブシイの占ひ女で、鳶色の顔を皺くちやにして、

「陛下、御運を見させて戴きませう。」と言つてお辭儀をした。
 「陛下」と聞いて、ウイルレムは少からず喜んだ。
 「陛下つて、どこの國のだい。」

「申上げる迄ありませんさ、新しい日耳曼帝國のね……」

占ひ女はにやにや笑つて返事をした。

ウイルレムは幾らか眞面目になつて來た。

「そんな帝國がいつ出来るな。」

ジブシイの女は紙片を取り出して、拙な文字でその年の一八四九年へその數字をそれぞれ書き加へた。

1849 1 8 4 9
 ————
 1871

「御覽なさいまし、こんな數が出ました。してみると、一八七一年だと見えますよ。」
 實際その通りで、日耳曼帝國が出來上つたのは、一八七一年だつた。
 ウイルレムは身體を乗り出すやうにして訊いた。

「ぢや、其の帝國を乃公は幾年位治めるだらうな。」

占ひの女は、紙片でまた勘定を始めた。以前と同じやうに一八七一年へ、その數字をそれぞれ書き加へながら。

1871 1 8 7 1
 ————
 1888

「ちよいと、こんな數になりましたよ、これで見るに陛下の御治世は、一八八八年までといふ事になりますわね。」

實際ウイルレム一世の崩くなつたのは、その一八八八年であつた。

皇帝はジブシイの女がてきばきと返事をするので、幾らか調弄氣味になつて訊いた。

「そして其の帝國はいつ迄續くだらうな。」

「さやうでございますね。」

女はまた勘定をし出した。一八八八年へ、その數字をそれぞれつけ足しながら。

1888 1 8 8 8
 ————
 1913

「こんな敷が出ましたよ。」

ジブシイの女は相手の眼の前へ、1913といふ数字を突きつけた。

皇帝はその数字を見ると、ふふんと鼻で笑つて行き過ぎたさうだが、一九一四年に始まつた今度の大戦争が、獨逸帝國をみじめな破滅に持つて往つたのを思ふと、ホオヘンツオルレルン家の最後の治世は一九一三年だつたといふ事になるのである。

飯を安く食ふ法

米が高くなつて、世間が騒々しくなつて來た。この食糧品の暴騰から來る生活難を濟ふには、朝鮮米を行き渡らせるのもよからうし、方針を過つた役人達を農商務省の椅子から引きずり下すのもよからうが、今一つそれよりもずつと良い方法が残つてゐる。

話は古いが、徳川四代將軍の頃、阿部豊後守忠秋が老中を勸めてゐた事があつた。豊後守といへば、江戸市中に棄兒があれば、屹度拾つて養育した程の慈悲深い男だつたが、それでも時

々は剽輕な悪戯をして、友達を調弄ふ程の心の餘裕を持つてゐた。

ある日の事、豊後守は同僚大久保忠成が大きな辨當箱を持つて來てゐるのに氣がついた。

「忠成め、飛んだ食ひぬけと見えるて。」豊後守はそつとその辨當箱に觸つてみた。箱は鎧櫃ほど持ち重りがした。「怖い重みだな。こいつをこつそり食べて置いて、どんな顔をするか見てゐたら面白からうて。」

かう獨語を言ひ言ひ、四邊を見まはしながら、そつと其の辨當を盗み食ひした。やつと食べてしまつた後では、腹は大名を鵜呑みにした蟄のやうに膨れてゐた。暫くすると、忠成はひよつくり其處へ顔を出した。恰ど時分時なので、黙つてそこにあつた辨當箱を取り上げた。そして蓋を開けたかと思ふと、急に變な顔をしてぢつと内部を見てゐたが、暫くすると氣もない顔で、

「今朝方あまり食べ過ぎたものか、どうも食氣しょけいがなくて困る。」

と呟き呟き、そつともともどほり蓋をして、箱を側に押しやつた。

豊後守は可笑しさを噛み殺して、忠成を相手に何かと世間話をしてゐた。話してゐるうちに、忠成の返辭が段々氣乗りがしなくなつて來るのも可笑しい事の一つだつた。暫くすると、

忠成は、

「今日は屋敷に用事があるので、少し早引をする。」と言つて慌てて下つて往つた。豊後守は其の後姿を見送りながら、腹を抱へて笑ひこけた。

夕方豊後が邸に歸つて、用人を相手にその話をする、用人ははたと膝を叩いた。

「なる程、さう承はつて、初めて解せました。」

茶話全集
そして獨りてくす思ひ出し笑ひをした。豊後が理由を訊くと、先刻忠成は道の通りがかりに、腹が空いて困るから、湯漬なりと振舞つて欲しいと言つて、座敷に上り込み、主人も、家來も、負けず劣らず大食をして歸つた後だとのことだつた。豊後守は舌打をして残念がつた。

米が高くなつたら、道の通りがかりに湯漬の食べられる良い友達をそこらに拵へて置く事だ。しかし良い友達が良い狗ころよりも少いものだ。仕方が無かつたら老中をでも友達にするさ。

人間の大小

今度の戦争で、聯合軍側の大立者は、何といつても英國首相ロイド・ジョウジ氏を第一に推さなければならぬ。その大立者のロイド・ジョウジ氏が、威爾斯^{ウェールズ}生れの、身長の低い、漸と五尺そこそこの小男だとは知らぬ人が多い。

昨年の春だつたか、ロイド・ジョウジ氏が南威爾斯のある都市へ演説に出掛けた事があつた。無論戦争に關する演説で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接獨逸文明が安物の外套のやうに、裏は襤褸つ切であるのを聴くための催しであつた。

その演説會の司會者といふのは、大のロイド・ジョウジ崇拜者で、この政治家の試みた演説は、どんな詰らぬものでも、みんな新聞を切りぬいて手文庫へしまつて置くといふ風の男だつた。だが、これまで一度も自分の崇拜する人に出會つた事がなかつたので、その日は朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。

会場には聴衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演説家を案内して、会場へ入つて来た脊の高い司會者は、先づ起つてこの名高い政治家を聴衆に紹介したが、そのなかに次のやうな言葉があつた。

「私はふだんから斯の偉人を崇拜して居りましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見掛けの堂々たるお方だとばかり思つてゐましたので、今日初めてお目にかかつて、實は驚いたやうな殆末で……」

次いで起つたロイド・ジョウジ氏は、小さいが、しかし胡桃のやうなかつちりした體軀を演壇に運んだ。

「唯今承はりますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、甚く失望せられたやうな御容子で誠にお氣の毒に堪へません。」と首相は脊高の司會者へ皮肉な目つきを投げた。「だが、今承はつて初めて氣づいたのは、吾々の生れた北威爾斯と此方とは、人間を測るのに標準が異つてゐるといふ事で、南威爾斯では、人間を頭から下の大きさに測るらしいが、私共の北威爾斯では反對に頭から上の大きさに大小を定める事になつてゐるのです。」

かう言つて、ロイド・ジョウジ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で振つてみせた。聴衆は譯もなく嬉しがつて、頭から下の馬鹿に大きい體軀を揺ぶつて喝采した。

婦人と多妻主義者

米國のユウタア州は、人も知つてゐる通り、モルモン宗の本山があるところだけに、そこには鶏のやうに女房をたんと引連れた人達も少くない。

このユウタア州選出の上院議員に、スムウトといふ男がある。先日紐育市のある會合で、紐育生れを何よりの自慢にしてゐるある婦人に出會つた事があつた。婦人はスムウト氏がユウタア生れだといふ事を聞くと、寡婦の雌鶏のやうにぐつと反身になつて近づいて來た。

「スムウトさん、一寸伺ひますが、お國には一人の殿方で、奥さんをたんとお持ちの方が、随分いらつしやるさうですが、眞實なんですか。」婦人の言葉には、胡椒のやうな皮肉な處があつた。が、人づきあひの上手なこの上院議員は、別に厭な顔も見せなかつた。

「眞實ですよ、奥さん。」

「失禮ですが、あなたもそのお一人なんですか。」
 婦人は寡婦鶏のやうに、伸びかかった蹠爪で、おとなしい上院議員を跳ね飛ばしかねないやうな素振を見せた。

「仕方がありませんよ。奥さん。實は土地の習慣で、私の故郷ではさうしなければならぬ事情があるのです。」

上院議員は剃り立ての顔を撫でながら、目で笑つた。

「事情つて、どんな事情なんです。」

婦人はきめつけるやうな調子で訊いた。

「いえね、かうなんです。奥さん方のやうな紐育婦人が——」上院議員はにやにや愛嬌笑ひをしながら言つた。「紐育生れの御婦人が一人して持つてらしやる色々な美點が、故郷の女では三四人集めなければ得られないからですよ。」

「まあ、お世辭のいい事……」

紐育生れの婦人は、カナリヤのやうな聲を立てて笑つた。そしてその一瞬間、この上院議員に限つて、三百人女房を持つても一向差支ないと思つたらしかつた。

下腹で猫が啼く

むかし小野淺之丞といふ少年があつた。隣家の猫が度々大事な雛つ兒を盗むので、ある日築山のかげで、吹矢で猫を狙ひ討にした。猫は額を射られて、後ろ足で立ち上りざま、二三度きりきり舞をしてゐたが、その儘ばかりと斃れて、辭世も何も詠まないて死んでしまつた。

氣の小さな淺之丞は、死様のむごたらしさを甚く氣に病んでゐたが、その翌る日から自分の腹のなかで、猫の啼き聲がすると言ひ出した。ある時は胸元で、またある時は臍の邊で悲しさうな聲がするので、淺之丞は生きた氣持がしなかつた。

淺之丞には伯父が一人あつた。伯父といふものは借金を拵へたり、戀病に取つ憑れたり、猫に崇られたりする甥にとつては、少くとも一人は無くてならない實用品なのである。伯父は言つた。

「土まむらひの兒が猫に崇られて病死でもしたら、いい恥晒しだ。いつそ切腹して果てたがよから

ら。」

浅之丞は眼に涙を一杯溜めて伯父の顔を見た。下つ腹のあたりでまたしても猫が啼いたやうに思つた。下つ腹といへば、つひ五六日前までは、「武士道」と「孟子」とが相住居をしてゐた大事な場所であつた。

浅之丞は伯父に勧められて切腹する事になつた。両親にもながの暇乞をして、やがて肌を脱いで、刀を手に取つた。介錯役に側に突立つてゐた伯父は落ついた聲で呼びかけた。

「慌てるではないぞ。折角の切腹ぢや。猫の聲のする邊を目がけて、一思ひに腹に突立てるがいいぞ。」

「はい。」と浅之丞は下つ腹を撫てながら、じつと聴耳を澄ませた。腹のなかでは猫の啼き聲どころか、鼠一匹潜つてゐる容子も見えなかつた。

「今朝方までは確に啼いてゐましたつけが……」浅之丞は臍のまはりを指先で押へてみた。「今は一向聞えませぬ。」

「そんな筈はない。氣を落ちつけてよく聴いてみるがいい。」

浅之丞は身體ぢゆうを耳のやうにして聴き入つたが、何一つ物音はしなかつた。

「一向に猫らしいものの啼き聲は致しませぬ。」

「猫め、それぢや逃げたかも知れんぞ。」伯父は聲を立ててからからと笑つた。「逃げたものなら仕方がなからう。今更切腹にも及ぶまいて。」

甥は手帛のやうに眞つ青な顔をして、短刀を白木の鞘に納めた。猫の逃出した下つ腹では、いつの間にか「武士道」と「孟子」とが歸つて来て、ひきがへる裏のやうに遠慮してそつと溜息をついてゐた。

珍らしい広告

倫敦タイムスの近刊號人事欄に次のやうな広告が載つてゐる。

「私は結婚前の若い紳士ですが、私に結婚をすつかり思ひ止まらせて下さる先輩の方がいらつしやるなら、お近づきになりたいものです。」

これを數多い広告のなかから拾ひ出した米國の雜誌記者は、奇妙な広告だ、珍しい広告だ、

滅多に見かけられない廣告だといつて、矢鱈に吹聴してゐる。結婚は悪い事ではないが、あひにく相手が要るので、兎角思ふに任せぬ事が多い。それに女の註文が段々高くなつて来るのは、男にとつて何よりも荷厄介である。ずつと以前は女といふものは、亭主が男でさへあれば辛抱したのだが、今では天使でなくつちや逆も氣に入らない。ところが、多くの場合男は女にとつて天使どころか、牛のやうに鈍間で、おまけに牛のやうに黙である。

男が女にとつて牛であるのと同じやうに、女は男にとつて蝙蝠である。謎である。多くの男は生れるときから死ぬまで女の爲に苦勞をしてゐるが、さういふ男でも、一生の間に少くとも二度はからきし女を理解し得ない時期があるものだ。二度といふのは、一度は結婚前で、一度は結婚後の事をいふのだ。

世の中には結婚したがつてゐる男も少くはなからうから、その人達のために言つておくが、諸君が獨身で通したからといつて、失望する女はまさか二人とはあるまい。よしんば失望したところで、その人達は直ぐ絶念められるに相違ない。ところが、諸君が結婚すると、一生涯失望し続ける人がある。その人は他でもない。細君である。

同じ時分、巴里の「フイガロ」新聞に次のやうな廣告が載つてゐた。

「上流の家庭にある鸚鵡の發音が悪いのを直すために、正確な佛蘭西語の出来る教師を雇ひたい。」

斷つておくが、發音の悪いのは、上流家庭の夫人では無くて、夫人よりも口數の少い鸚鵡なのである。

鸚鵡に佛蘭西語の巧い教師を雇ふといふと、一寸見は贅澤なやうだが、鸚鵡に訛を喋舌なまりしておいて、じつと辛抱してゐるよりか、どれ程節儉しやつにつくか知れたものではない。佛蘭西に文學が衰へないのは、鸚鵡の訛を氣にしないではゐられない程、國民が國語に敏感なところも一つの原因になつてゐる。多くの代議士に狗のやうな日本語で喋舌なまりらしておいて、黙つて夫を聽く事の出来る日本人の無神經さがつくづくいやになる。

生命の勘定

富豪ロスチャイルド男が、熱病にひどく苦んだ事があつた。ちやうど男が七十五歳の折の事

で、齡が齡だから、老人自身も助からないものと斷念めて、

「乃公も今度こそ愈々お暇乞だ。」

と、毎日のやうに溜息ばかりついてゐた。

お抱への醫者は、朝に晩にやつて来て、老人の脈を押へたり、咽喉を覗いたりした。咽喉を覗く折には、老人は家鴨のやうにあんぐり口を開けて仰向いた。

すると、醫者は叮嚀に見終つて、

「いや、大した事はございません、程なく御全快になりませう。」

と、請合つたやうに言つた。だが、醫者の言葉通りにも往かないものと見えて、病氣は重る一方だつた。

皮肉屋のトルストイは、死際に枕もとに立つてゐるお醫者達の顔をじろりと尻目にかけて、「この人達は醫者の學問にかけたなら、みんな知りぬいてゐるんだが、その醫者の學問といふ奴が何一つ判つてないんだから困る。」

と、呟たといふ事だ。だが、それはトルストイが無理なので、學問の餘り頼みにならないのは、何も醫者の方にのみ限つた事ではない。

病氣は重くなる一方だつたので、ロスチャイルドは床のなかで神経を針鼠のやうに尖らせて口癖のやうに、

「今度こそいよいよお暇乞だ。」

と呻き通してゐた。醫者は例のやうに叮嚀に診察をしたが、自分の診察の届かないところは、お世辭を使ふ外に仕方がないといふ事をよく知つてゐたので、

「御前、大丈夫でございます。この御容體ぢや百歳までは屹度お請合が出来ます。」

と言つて、てれ隠しにお辭儀を一つした。

「百歳まで。」名高いこの資本家は、夫を聞くとむっくり頭をもち上げた。「それは大變な損だよ。神様がそんな御損な算盤をお持ちになるといふ法はない。七十五で取引の出来るものを百までも出すなんて……」

大事の自分の生命までを、戦時公債なみに取扱つてゐるのは、いかにも資本家らしくて面白いが、夫よりも感心なのは、神様の勘定だかいのを、ちゃんと見ぬいた所にある。

慈善家の心得

鎌倉の圓覺寺に、誠拙和尚といふ坊さんが居た。ある時三門を拵へようとして、弘く佛縁のある人達から寄進を募つた。すると、その頃札差をしてゐた梅津傳兵衛といふ男が、心ばかりの寄附につきたいからといつて和尚を訪ねて來た。傳兵衛は膨まつた懷中から、嵩高な金包を取り出して和尚の前に置いた。

「和尚様、ほんの聊かではござりますが、ここに金子が五百兩ござりますから、今度の三門の御建立へ是非お加へおき下されませうやうに。」

和尚はちらと金包を見たが、

「ああ、さうかい。」

と言つたきり、直に眼を外つ方に逸らした。

傳兵衛は不平で堪らなかつた。五百兩といへばなかなかの大金で、これだけあつたら女一人

の靈魂を買ふ事も出来るし、男の運を買ふ賭博をも打つ事が出来るのだ。それを知らない和尚でもない筈だ。と、傳兵衛はかう思ひながら、態と覗き込むやうに和尚の顔を見た。

「ほんのぼつちりではござりますが、五百兩だけ御寄進申し上げます。」

「さうか、よしよし。」

和尚はまた一言言つたきり、矢張り外つ方に向けて素知らぬ振をしてゐた。

傳兵衛は幾らか腹に据えかねた。幾ら出家の身とは言ひながら、他人から寄進を貰つて、あの素振は蟲が善すぎる。五百兩といへばかなりの大金だ。自分がこれだけの金を儲けるには、額に珠のやうな汗も流した。嘘も幾度か吐いた。夫を今惜氣もなく寄附しようといふのだ。和尚はそのお禮として、來世で自分に特別上等の居所を取持つてくれる程の信用はないにしても、今少し叮嚀な挨拶があつてもよかりさうなものだ。傳兵衛は少し言葉に角を立てた。

「和尚様、五百兩と申しましたところで、當山におかせられますは何のお役にも立ちますまいが、私にとりましては、聊か身分に過ぎた寄進かと存じます。就きましては何か一言の御挨拶を下されまして……」

「禮が言つて欲しいと言ふのか。」

こちら向きに引き直つた和尚の眼は、蠟燭のやうに光つた。

「御意にござりまする。」

傳兵衛は木兎のやうに頬を膨らませた。

「馬鹿な。お前が善根をするのに、なぜまた俺が禮を言はんければならぬのか。」

和尚の聲は挽臼のやうに上から落ちかかった。その下に壓し潰されたお伽譚の猿公えんまこのやうに、傳兵衛は疊に顔をすりつけてゐた。

そんじよそこらの慈善家たちも、よくよく心得てゐて欲しいものだ。

落錢を拾ふ樂み

「世の中に何が嬉しいといつたつて、途で落したお鳥目が、自分の手に還つた時ほど氣持のいいものはございません。お上人様は御存じていらつしやいますか。」

かういふ話を良寛上人にしたものがあつた。上人は言ふ迄もなく、越後國上山の五合庵に棲んでゐた名高い禪僧である。

この話をした男だつて、世の中には外にもつと嬉しいことがたとあるのは知つてゐたらしいが、行ひ澄ました良寛に、そんな話も出来なかつたものだから、精々落したお鳥目位で済ます事にした。

良寛は夫を聞くと、不思議さうな顔をした。そして汚れた巾着から散錢ぼんせんを二つ三つ取り出して態と道の上に落した。お鳥目はかちんと音を立てて、上人の脚もとで二三度くるくると舞つた。

良寛は手をのばして其の散錢を拾つたが、格別變つた氣持もしなかつた。

「一向嬉しくない。何うしたわけだらう。」上人は呆けた顔をしてぢつと考へ込んだ。「もつとたんと落さなくちやならないのか知ら。」

先刻から上人の素振を見て、馬のやうににやにや笑つてゐた男は、一寸小腰をかがめた。

「お上人さま、今一度試してみても下さい。さうしたら屹度お判りになるだらうと思ひます。」

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取り出して、また道の上に落した。散錢はお上人に當てつけたやうに、其邊をころころ轉げ廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに滑り込んで、その

まま姿を隠してしまつた。

良寛は手を延ばして、そこらを捜し廻つたが、お鳥目は一向顔を見せなかつた。僧侶ぼんさんはうろたへ出した。禿げた頭を唐茄子トマトのやうに眞つ赤にして、草のなかを掻き分けてゐたが、暫くしてやつとこさで見つかつた。上人は汗ばんだ顔を持ち上げた。

「なる程嬉しかつたよ。ほんたうに嬉しいもんだな。落した錢を拾ふといふものは。」

胃の腑

むかし、松平不昧公が京都に上つた時、ある日の事、茶人千宗佐を訪れようとして、前もつて其の由を通じておいた。宗佐は相手が不昧公だといふので、色々趣向を凝らした午餐の用意などしておいた。——一體茶人の料理といふものは、味よりも趣向のもので、趣向さへ氣に入つたらお膳のものは言ふに及ばず、皿を食べ、椀を食べ、おまけに亭主役の禿頭を食べたつて少しの差支もないのだ。

不昧公は千家へ往く途中で、急にその日は大徳寺に寶物の蟲干がある事を思ひ出した。「さうだ、蟲干を觀に往かう。宗佐へは歸り途にしたつて遅くはあるまい。」

不昧公は先きに大徳寺の方へ廻る事にした。蟲干には色々珍しい物があつたので、この風流大名は思はず時を過した。寺の門を出たのは正午も大分過ぎてゐて、ここへこになつた胃の腑のなかでは、先刻蟲干で見た吳道子の觀音さまや、一休和尚の木像いもじやが空腹さうに欠伸をしてゐた。

千家では、また宗佐が欠伸ばばかりし續けてゐた。不昧公が着いたのは、欠伸が中つ腹と變つてゐた時なので、前々から凝した饗應の趣向も、すっかり臺なしになつてゐた。亭主はお客を茶席へ通すと、薄茶を一服出したままで、素知らぬ顔をしてゐた。腹の空いた大名は、次の室の物音にじつと聽耳を立ててゐたが、別段膳部を用意するらしくもなかつた。

不昧公の胃の腑は深く宗佐を怨んだ。これまで空腹といふ事を知らなかつた大名の頭腦は、急に胃の腑の味方をして、何かしら復讐の趣向を考へるらしかつた。

その翌る年、不昧公は江戸の邸へ宗佐を招いた。宗佐は名高い大名の折角のお招きだといふので、出来るだけ供をたんと連れて、供には挟み箱や長刀なども擔がせた。そして大威張りで

海道筋を練歩かせたものだ。

不昧公は江戸の邸で遙にその噂を聞き傳へた。胃の腑はいつぞやの復讐の時が来たのを思つて小躍りした。不昧公は用人を呼んで、何か知ら言ひつけた。用人は急いで品川の宿まで出掛けて往つて、茶人の一行を待ち受ける事にした。仰々しい宗佐の行列が來かかると、松平家の用人は蠡斯のやうに表へ飛んで出た。そして不昧公からだといつて、大きな金包みを宗佐の鼻先きに突きつけた。

「折角お招きは致したが、殿は俗腹ぞくはらのお手前はもう厭になつたと仰せらるるによつて、お氣の毒ではござるが、ここからお歸り下さるやうに。」

かう言つて、用人はさつと引揚げてしまつた。宗佐は化かされたやうな眼つきで、いつまでも其の後姿を見つめてゐた。

何事も胃の腑から起きた事だ。胃の腑からはどんな事でも起きるものだ。



獨帝の拳骨

戦争になつてからは、然う暢氣な事も出来まいが、伯林の市中では、いつも大晦日の夜は、市街を歩く人達が、出合頭に誰彼の容捨はなく、いきなり拳を固めて帽子の頭をばかりと擲りつける事が流行る。

今の獨帝は人一倍この遊びが好きで、皇帝の位に即いてからも、大晦日の晩になると、こつそりお忍びで市街へ浮れ出し、擦れ違ひざまに他人の隙を見てはばかりと擲りつけたものだ。

誰彼の容捨なく、他人の帽子を擲りつけるといふのは、年中頭ばかり下げて暮してゐる人達にとつて、實際胸の透く遊戯に相違なからうが、獨帝のやうに、朝から晩まで内閣の大臣達にお辭儀をさせ通しにさせてゐる者は、もつと他の遊びを好いてもよかりさうなものだ。

しかし、獨帝は好きな事をするのに、誰に遠慮は持たない性分である。その上一つ間違つたら、相手から自分の帽子を擲りつけられるといふ心配があつて見れば、獨帝は何うしても、此

の遊びを捨てる譯に往かなかつた。

ある歳の大晦日の晩、獨帝はいつものやうにお忍びでこつそり市街へ飛び出した。明るく灯の入つた市街には、自分の頭を庇ひ立てるやうにして、尻目に他人の帽子を覗つてゐる人達かうよろよしてゐた。獨帝は急ぎの用事でもあるらしい顔つきで、そのなかに紛れ込んで往つたが、擦れ違ひざまに、牛のやうな呆けた顔の男を見ると、いきなり拳をあげてばかりと帽子を叩きつけた。

その瞬間、獨帝は眞青になつて、帽子から拳を引き外した。見ると、白い手首に眞紅な血がたらたらと流れてゐる。獨帝は恨めしさうに其の男の帽子を覗き込んだ。帽子の山からは釘が二三本頭をのぞけてゐた。其の男は釘仕掛を發見みつけられると、慌てて帽子を脱いで小脇に抱へ込んだ。そしてセルロイド製のやうな禿頭をふりふり群集に紛れ込んだ。

獨帝はぶつぶつ呟きながら宮城に引きかへした。そして侍醫の鼻先に血だらけな拳骨をぐつと突き出した。侍醫は叮嚀に繃帯をした。

天國に結婚のない理由

結婚といふ事は、人間のする仕事のうちでは、あまり立派なものではない。あれは賭博や編物などと同じやうに、外に何も仕事のない時にするほんの閑潰して、歌を詠むとか、畫を描くとか、そんな結構な仕事を知つてゐる人達にとつては、結婚なぞ成るべくしない方がいい。だから、基督も天國では「娶らず、嫁かず」だと言つてゐる。天國のやうな結構づくめなところでは、結婚は賭博と一緒に御法度となつてゐるのだ。

説教家としては、米國で第一人者と言はれたビィチャアが、ある時教會でお得意の説教をした。説教はいつに異らず面白く出来たので、ビィチャアは上機嫌で教會を出ようとした。すると、それまで出口に衝立つてゐた妙齡の美しい娘が、一寸會釋をしてこの説教家を呼びとめた。

「先生、ちよいとお伺ひ致しますが——」娘は嬌へたやうな身振をした。「天國には結婚が無

いやうに福音書に書いてありますが、あれは眞實なんてございませうか。」
 ビイチャアはじつと娘の顔を見つめた。娘はチヨコレエトよりも、お芝居よりも一番「結婚」
 が好きらしい口もとをしてゐた。

「眞實ですよ。天國には結婚なんてものではありません。」

「何故でございます。」娘は此の世で結婚をした上に、天國でも今一度結婚をしたさうな口振で
 訊きかへした。

「それは、何でせう——」と牧師は皮肉な返事をした。「天國には女といふものが居ないからで
 せうて」

「天國には女が居ません——」娘は軍鶏しんけいの牝のやうに屹となつて顔をあげた。「違ひますよ。
 先生。そんな理由で天國に結婚が無いんぢやございませうまい。」

「ぢや、どんな理由で？」雄辯な牧師は覗き込むやうにして訊いた。

「それはね、かうなんですよ。」と娘は石のやうな白い歯を見せてきつぱりと言つた。「天國で
 はお嫁入しようにも肝腎の式をあげて下さる牧師さんなんて方は、一人も居ないからなんてせ
 うよ。」

接吻か二十弗か

メリー・ガアデン嬢といへば今は巴里に住んでゐる米國で名うてのプリマ・ドンナだが、あ
 る時劇場の稽古場で、大事の寶を失くしてしまつた。

メリー・ガアデン嬢が失くしたのは、大粒の眞珠であつた。嬢は血眼になつて捜したが、か
 いくれ分らなかつた。で、一座の者に申し渡しをして、眞珠を拾つてくれた者には、接吻か、
 二十弗か、どちらかをお禮にしようといふ事に取り極めた。

「接吻がして貰へる……」

皆は熱病を患つた様な眼つきをして、稽古場を捜し廻つた。すると、年の若い道具方の一人
 が小道具のなかで件の眞珠をみつけた。女優はにこにこもので夫を受取つて身につけた。

「有難う。お禮はどちらにした方が良いの。接吻？」女優は美しい眼で道具方の顔を見た。化
 粧石鹸でよく洗つた上に、香水でも振りかけなければ、連も接吻が出来さうな顔ではなかつ

た。「それとも二十弗の方にするの。」

「へ、へ、へ……手前接吻は大の好物なんてげすが……」道具方は、薔薇のやうな女優の唇を見て狗のやうに卑しい眼つきをした。「でも、お腹には代へられやせん。廿弗の方を戴きやせう。」

それから二三日経つて、メリー・ガアデン嬢は、富豪のアンドリウ・カアネギイ氏に出會つてこの話をした。

「道具方め、若いに感心な男ぢや。」カアネギイ氏は、美しい女優の唇にちらと眼をやりながら言つた。「二十弗受取つてみれば、この後接吻するにしても、精々大事にしませうからの。」カアネギイ氏は良い事を知つてゐるが、しかし道具方はもつともつと良い事を知つてゐたのだ。それは二十弗あつたら、接吻と、酒と、今一つ料理をさへ味はふ事の出来る安値な世界がこの世の中にあるといふ事である。

十六人の女房

結婚といふものは、不思議なもので、一度で靈魂まで黒焦にしてこりこりするものもあれば、性懲りもなく幾度か相手を変へてゐるものもある。ソロモンは一代のうちに數へきれぬ程の女と縁を結んだといふが、あの通りの賢者の事だから、訊いてみたら色々面白い談話を聞かされてくれたに相違ない。

佛蘭西のポルドオにジエエムス・ゲイといふ男が住んでゐた。何一つ立派な仕事は残さなかつたが、一代のうちに十六人の女房を持つたといふので、かなり世間の評判になる事が出来たのは飛んだ幸福であつた。

ある物好きの男が、ゲイに會つて訊いた事があつた。

「そんなにたんと奥さんをお持ちで、よく飽きませんでしたね。私などはたつた一人しか持ちませんが、夫でも少し持ち過ぎたやうに思ふ事が度々ありますよ。」

すると、ゲイは急ににこにこして、
 「滅相な、女は一人一人みな別物ですよ。一人で懲りたからと言つて、外の幾人もが然うだとは限りません。つまり女房をたんと持つのは、書物をたんと讀むのと同じで、色々の知識を得るといふ事です。」

と答へたといふ事だ。

そのゲイ爺さんは百一歳の時、十六人目の女房に亡くなられて、こつそり十七人目の後添を貰はうとしたが、親類縁者の者に留立されて、ぶつぶつ呟きながら、漸く思ひとまつたといふ事だ。爺さんに取つてこれは面白い新刊小説を讀み損ねた氣持がしたに相違ない。

英吉利に十二人の女房と十三度結婚したといふ不思議な男がある。一番目の女房はその男を捨てて、若い戀人と墮落したので、男は涙を流してその女の噂ばかりしてゐたが、程なく二度目の結婚をした。そして次から次へと結婚と葬式とを繰り返して、十一人目のお葬ひを出したのは、丁度八十四の夏だつた。それから爺さんは縹緞よしの寡婦婆さんと結婚したが、實をいふと、其の婆さんは一番目の女房なので、婆さん自身は同じ男と二度目の結婚だとはよく知つてゐたが、爺さんは何にも氣づかないで、始終にこにこしてゐたさうだ。

俳諧師の頓智

いつの頃だつたか、一寸はつきり判りかねるが、長崎に素行といふ俳人があつた。ひどい行脚好きで、閑さへあれば暢氣に旅に出歩いてゐた。そのむかし、芭蕉は頭陀袋に杜詩と山家集と普門品とを入れてゐたさうだが、素行の貧しい懐中には、いつも俳諧七部集が一冊捻ぢ込んであるに過ぎなかつた。

ある時、田舎道で日を暮らした事があつた。ちやうど冬の最中で、寒さは無遠慮に俳諧師の脊筋から懐中から入つて來た。素行はべそを掻きさうな顔をして野道を急いだ。すると、やつと一軒の百姓家が見つかつた。俳諧師は石のやうに冷い拳をあげて門の戸を叩いた。

戸はなかから開けられて、ほろ襪すねつ片のやうな皺くちやな媼さんが、闇のなかからうつそり顔を出した。

「旅の者でござる。申しかねたが、一夜の宿をお借り申したい。」

素行は木の葉のやうに寒さうに身體を顫はせた。媼さんは闇を透してうそうそ旅人の容子を嗅ぎ分けるらしかった。

「坊さんかの。坊さんならお泊め申すほどのにの。」

媼さんは口のなかで呻くやうに言つた。

俳諧師はそれを聞き逃さなかつた。

「さうとも、さうとも。俺はその行脚坊主ぢや、坊主ぢや程によろしく頼む。」

早口にかう言ひながら、媼さんに安心させるやうに頭巾を取のけて見せた。なる程頭は圓かつた。

素行は奥へ通されて、先づ佛壇の前へ坐らされた。媼さんは亡くなつた爺さんの回向が頼みたかつたのだ。俳諧師はてんで經文を知らなかつたので、ひどく當惑したらしかつたが、ふと氣づいたのは懷中の七部集であつた。彼は勿體ぶつた手附でこの集を取り出した。そして作者の名前を初めから順々と読み下した。

「其角、嵐雪、去來、丈草、野坡、杉風、北枝、凡兆、支考……」

かう言ひながら、時々思ひ出したやうに鉦を鳴らしたものだ。媼さんはお蔭で亡くなつた爺さ

んが淨土に生れ代つたもののやうに涙を流して喜んだ。そして暖い粥と暖い夜着とを恵んでくれた。

これを読んで、くすくす笑ひ出さない僧侶が今幾人あるだらう。彼等も皆同じやうな事をしてゐるのだ。

寄附金の請取

紐育の新聞記者フランス・ロイプ氏が、先年亞米利加印度人の調査委員をしてゐた頃、ある日の事、見も知らぬ印度人が、其の事務所へひよつくり鶯色の燒栗のやうな顔を出した。そしてポケットから錢包みを取り出して、卓子の上に置いた。

「ここに五十弗ありますから、お請取を願ひます。」

印度人はかう言つて反身になつた。その金は公用金としてロイプ氏が請取るべき筈のものだつた。

ロイプ氏はその金をあらためた。そして確に請取つた由を言つたが、印度人は何か待心でゐるらしく、兩手を胸の上に拱んだまま、卓子の前に立ち跨がつて、一向歸らうとしなかつた。

「何か外に用でもあるのかね。」

ロイプ氏は燒栗のやうな顔を見上げた。

「請取證を待つてゐるんです。」

印度人は厚い唇のなから咳くやうに言つた。

「何だつて請取證なんか要るんだね。」ロイプ氏は口を尖らした。「君は私があとからまたこの金を請求しやしないかとも思つてゐるのかい。」

印度人は肩を聳やかして言つた。

「私は耶蘇信者なんです。いつかは屹度神様にお目に懸るてせうが、その折彼得は私を天國に上げる前に、此の五十弗の請取證を見せろといふに定つてゐます。その折請取證が要るからといつて、まさか地獄のなかを搜し廻るわけにも行きませんからね。」

「請取證を取るのに、何だつて地獄の中を搜し廻らなければならぬのだね。」

ロイプ氏は不思議さうに訊いた。

「でも、貴方がたが地獄に墮ちなくつて、誰が墮ちるんです。」

ロイプ氏は鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒り出したが、それでも請取證を書くには書いた。印度人はそれを持つてのつそり出て往つた。

骸骨の議員

カンサス出の米國上院議員に、インガルスといふ男がある。爪立ちしたら、天國にでも手が達きさうな脊高のつほで、おまけに酷い瘦つびだが、それでも地面ぢへんの事が氣になるかして、いろいろ郷里の事に骨折るので、カンサスでは評判のいい男である。

この男の近所に、大の仲よしのお醫者がゐる。インガルスとは打つて變つて肥えた男で、診察のひまびまには、靜な書齋でエマアソンの論文を読むのが何よりも好きであつた。ところが困つた事には、このお醫者がエマアソンを讀まうとすると、極つたやうに其處へ飛び込んで來て邪魔立する者がある。外でもない、ちんぴらの新聞賣子で、醫者とエマアソンとの知らない

色色の事が載つてゐる新聞を押賣りに來るのだ。醫者はそれが蒼蠅くて仕方がなかつた。ある日の事、インガルスは醫者の診察室に脊高な身體を現した。別に心の臓が悪くなつたので診察を頼みに來た譯でも無かつた。米國では心の臓はオペラ袋バック同様女の持物になつてゐるので、脊高の議員はそんな物は持つてゐなかつた。醫者は友達の顔を見ると、例のやうに新聞賣子がうるさくて、しみじみエマアソンが讀めないのが何よりも残念だと話をした。

ところへ、又しても新聞賣子の入つて來るらしい足音が聞えた。醫者は早速の氣轉で押入から標本用の人間の骸骨を引張り出し、それをちゃんと椅子に腰かけさせて、自分達は何食はぬ顔で次の室に隠れてゐた。

新聞賣子は扉をあけて、勢ひよく診察室に入つて來た。そして毎日の事なので、あたりに氣も注げないで、づつと卓子の前までやつて來た。見ると、いつもの椅子には、肥えた醫者の代りに、骸骨が一人腰をかけて、窪んだ眼で新聞賣子を見詰めながら、白い齒をむき出しにけらけら笑つてゐた。賣子は聲を立てて泣き泣き外へ飛び出した。

醫者は腹を抱へて笑ひこけた。眼からは涙さへにじみ出してゐた。脊高の上院議員は流石に可哀さうになつて、後を追つて表へ出た。そして御機嫌取りに賣子の手から新聞を一枚買ひ取らうとした。賣子は首を掉つて、どうしても新聞を呉れようとしなかつた。

「そんなに着物を被たつて欺されるもんかい。」賣子は相手を見上げながら、べそをかきかき言つた。「たつた今骸骨の所を見ちやつたんだもの。」

博士と小學生徒

詰込み主義の鸚鵡流の教育では、日本の學校は何處にもひけを取らないが、何事にも自由な米國でも、教育だけはまた別だと見えて、近頃かういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝課業の始まる前に、定つたやうに生徒を講堂に集めた。そして小高い教壇の上に鉛筆のやうに眞つ直に衝立ちながら、咽喉一杯の聲を張りあげて訊いたものだ。

「皆さん、あなた方はかうやつて大勢講堂に集まつてゐますが、萬一ひよつとした事で、この建物から火が出た時には何うしますね。」

なる程學校の建物は、校長が火を氣遣ふやうに粗末な安普請で、そこらの柱などは僂麻質斯でも思つてゐるらしく、イヒチオウルのやうな茶色の藥で塗りくつてあつた。

夫を聞くと、生徒は讚美歌でも唱ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもはみんな腰掛から立ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽でないで順々に外へ逃げ出します。」

校長は満足さうにぐつと顎をしゃくつた。彼はかういふ風にさへ教へて置けば、いつどんな事が起きても、生徒は満足に避難出来るものだと思つてゐるのだ。

ある日の事、その學校へヴァン・ダイク博士が訪ねて來た。博士は聞えた文學者だといふので、校長は生徒のために一寸お話を頼んだ。

ヴァン・ダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに衝立つてゐる教壇に立つた。そして落つきのある聲で言つた。

「皆さん、私は博士ヘンリ・ヴァン・ダイクといふ者です。私が今ここに立つて皆さんのためにお話をすると言つたら、皆さんは何うしますか。」

博士はかう言つて、慈愛の籠つた眼で、じつと生徒を見おろした。

生徒は家鴨のやうにぎやあぎやあ聲を揃へて言つた。

「先生、私どもはみんな腰掛から立ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽でないで順々に逃げ出します。」

ヴァン・ダイク博士は夫を聞くと、僂麻質斯に懼つたやうに痛さうに顔をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出會したやうに、眞つ赤になつて顫へてゐた。

卵を一つ

ある時、發明家のトオマス・エヂソンの實驗室を、若い婦人客が訪ねて來た事があつた。すべて天才の事業を認めて、心より夫を崇拜するものは、男よりも女に多いものだ。こんな時に、男はどうかすると、嫉妬に驅られて、けちを附けたがるものだが、女は割合に素直な心を持つてゐる。

エヂソンは美しい女客の爲に、自分が今實驗に取りかかつてゐるいろいろの仕事を解り易く

説き聞かせた。丁度夏の午前の事で、女客は顔の汗を拭き拭き感心したやうに幾度か首を掉つて聴き惚れてゐたが、暫らくすると發明家に訊いた。

「承はつてみますと、何もかも結構づくめですわ。これまで先生には、こんなに幾つもの立派な發明をなすつていらつしやりながら、まだ何かしら仕遂げてみたいと思つていらつしやる事業がおありになりませうか。」

「有りますともさ。」發明家は女客の顔をじつと見かへしながら言つた。「もしか貴女が誰にも洩らさないつて事を約束して下さいと、私が取つて置き希望をお話してもよい。」

「お約束致しますとも。屹度誰にも話しは致しませんわ。」

若い女客は幾らか顔を赭らめながら、身體を乗り出すやうにして言つた。女にしてみれば、この偉い發明家が何か知ら内證事を自分にだけ打明けて呉れるといふ事が、何よりも嬉しかつたのだ。「私承はる事が出来たら、それが一日も早く成功するやうに神様にお願掛ごんかけしますわ。」

「有り難う。厚くお禮を申しておきます。」エヂソンは眞面目な口を利いた。そして他人に立聴でもされるのを氣遣ふやうに、幾らか聲を落して言つた。「私のやつてみたい事はね、御覽なさい。那處あそこに扇風機が廻つてゐるでせう……」と部屋の隅つこにある扇風器を指さした。「あ

いつに卵を一つ投げつけてみたいんです。唯それだけでさ。」

十二種の新聞を読む小僧

今はむかし、米國のアイオワ州、パノラの町のある銀行支店に給仕を勤めてゐた十五歳ばかりの少年があつた。恐ろしくこまめな性質で、朝はやく起きると、ぢきに床を掃除する。掃除がすむと、今度はせつせと雑巾がけをする。それから暖爐を焚きつけ、窓硝子を拭き、眞鍮製の欄干を拭き込む。拭いて拭いて重役の頭のやうにびかびか光り出すまでは少しも手を休めない。

室のなかの掃除がすむと、給仕はいきなり表へ飛び出して、街道を掃除する。雨あがりの道に水溜が出来てゐると、附近の土をならげて夫を埋合はせ、町の人の通り易いやうにする。かうしてせつせと働いて、一週に三弗の給金を貰ふ外には、別に誰からお禮を言はれるのでもないが、給仕は少しも不足の顔を見せなかつた。

その一週三弗の給金で、給仕はいつも素晴らしい買物をする事に定めてゐた。素晴らしい買物といふと、算盤高い今の人は直ぐ船株か、鶉の卵かを聯想するらしいが、給仕の買ったのはそんなけちな物ではなかつた。亞米利加のいろんな市から出る週刊新聞の主だつたもの十二種ばかりだつた。

「何だつて、そんなに週刊新聞ばかり買込むのだね。」

ある時、同じ銀行の貯金掛がかう言つてたづねると、給仕は伶俐さうな、くるくるした顔をあげた。

「廣い世界のいろんな事が知りたいからなんです。パノラの町は私にとつて餘り狭すぎるんです。」

夕方銀行の仕事が済むと、給仕は自分の室に入つて、その十二種の週刊新聞に氣も心も吸ひ取られたやうにじつと讀み耽つたものだ。そして狭いパノラの町で、どんなことが起きようがそれには少しも頓着しなかつた。

給仕は成長おほまきくなるに連れて、ぐんぐん出世をした。タフト氏が大統領をしてゐた頃、この給仕を大藏省の秘書に抜擢しようとしたが、給仕は首をふつて承知しなかつた。その人こそシカ

ゴの有名な銀行家ジョヂ・レイノルツ氏で、今では紐育の銀行を除いては、米國第一の大資本を有つてゐるシカゴ某銀行の頭取である。

氣取屋の婦人

米國は華盛頓市のW Iといふ名高い料理屋に、ある日の事、孔雀のやうに盛粧し込んだ婦人が入つて來た。入口の扉の側に立つてゐたのは、折目の正しい、仕立おろしの流行服を着込んだ紳士だつた。婦人は尻目にじろりと紳士の顔を見ながらいつた。

「どこか窓に近い小卓はありませんか。」

紳士はそれを聞くと、黙つて婦人を連れて窓際の小卓に案内した。卓の上には眞紅な花が酒のやうな甘つたるい香を漂はしてゐた。紳士は眞新しい白い手帛で椅子の埃を拂き、そこらに散らばつてゐる麴麴屑を拂ひ落したりした。手帛はその朝紳士の細君が、恩に被せながら簞笥の底から態態取り出して呉れたものだつた。

丁寧な紳士が小卓の側を離れようとする、婦人は献立表を手に持ったまま、女王のやうな氣取つた聲で呼びとめた。

「ちよいとお待ち、この店は何が自慢なの。」

「さあ。」紳士は一寸額へ手をやつた「何よりも甜瓜がうまいんですがね。」

孔雀の女は黙つて頷いてみせた。餘り願をしゃくり過ぎたら、損の往くやうな領き方である。

「ビフテキも一寸食べられます。」紳士は自分が何よりもビフテキが好きなのを忘れなかつた。

「成程ね。」婦人はにこりともしなかつた。

その瞬間、紳士はいつものものを思ひ出した。女といふ女が戀人より新聞小説よりも好きな馬鈴薯である。

「それから馬鈴薯料理もなかなか美味しく食べさせますよ。」

「さう、結構だわね。」

餘り取濟ました口の利き方なので、紳士はたうとう腹を立ててしまった。

「奥さん。それから此店には今一つ自慢のものがありませんよ。それは紳士と給仕との見さかひ

のつかないお客が偶に来るといふ事です。」

紳士は捨臺辭をかう言ひ置いて、鄭重にお辭儀をして出て往つた。紳士とは誰あらう、イリノイ州の上院議員ジエムス・ハミルトン・レキス氏であつた。

女形の心得

むかし、翫雀歌右衛門が、女形をする心得を言ひ残した事があつた。それによると女形はすべて膝がついて居なければならぬ。何よりも大事なのはこの膝で、そして手元を柔かにしてゐれば、その儘女になりきる事が出来るのださうだ。濱村屋菊之丞といふ女形が、木挽町で菅原を演つたとき、覺壽と梅王と千代との三役を勤めた事があつた。梅王には車曳のくだりて兩臂を張り、手先を肩に預けないやうに腕を組んで、

「喰ひふとつた時平どんの尻こぶら、二つ三つ……」

と左手の拳で右の腕を打つところがある。それを菊之丞が何うするかが幕内の面白い問題と

なつてゐた。

といふのは、その頃は女形のつましい口からは、尻といふやうなはしたない言葉は夢にも言つてはならない事になつてゐた。ところが、菊之丞は稽古の時、そこへ來ると、急に聲を落して何か譯の分らぬ事をくどくどと言つて胡麻化してゐた。

「何を言つてるのだらう、芝居が開いてもあんなぢや困つてしまふが。」

皆は寄々その事を話して氣遣つたものだ。すると、初日の幕が開いた。待ち設けた車曳となつた。皆は身體ぢゆうを耳のやうにして、その臺辭を待つた。菊之丞は叫んだ。

「時平どんの御面相二つ三つ……」

皆はやつと安心して、ほつと息をついた。

大阪俳優のうちで女形として第一流といはれる中村福助が、去年淀川に堤切れがあつた當時、清荒神から大勢の蟲眞客と一緒に、大阪歸りの電車に乗込んだ事があつた。電車が十三と三國との間に來ると、出水はもう軌道を浸してゐて、車は鳥のやうに聲を立てながらおつかなびつくりに進むより外に仕方がなかつた。福助は物珍らしさうに窓に顔を押しつけて、夜目に氣味悪く光る水の面を眺めてゐたが、ひよいと連の男を振かへつたと思ふと、

「どうだす、これが砂糖水やつたらよろしおまんになあ。」

と、舌舐ずりをしながら言つてゐた。

帝劇の尾上梅幸が、芝居がはねてから夜遅く友達と一緒に外濠を歩いてゐた。空には星が瞬きをしてゐた。梅幸は立ちどまつてじつとそれに見とれてゐたが、しみじみと思ひ込んだやうに、

「あれが、みんなダイヤだつたらなあ。」

と獨語のやうに言つたといふ事だ。

梅幸も、福助も、さすがに女になりきつてゐる。値安で成るべく好い物を手に入れたと思つてゐる點において。

賣子娘

名高い紐育の百貨店ワナメエカアの手套部に、近く入つて來た賣子娘があつた。ある日の

事、婦人のお得意に手套を一つ賣つた後で、今度は直ぐ側に立つてゐる紳士のお客の方に振向いた。

「入らつしやいまし。何か御用のお品でも……」

「羊皮の手套を一つ。」

賣子が取り出した品を受取りながら、紳士は言つた。

「こんな事を言つても、氣に障へて貰つては困りますが、先刻の婦人に對するあなたの應對振はまだ十分とは言へなかつたやうですね。あの方はあなたの出やうによつては、もつとお需めになつたかも知れませんかよ。」

賣子娘は酸っぱい物を嘗めさせられたやうな顔をしたが、それでも負けては居なかつた。

「あなたはお客扱ひがお上手でいらつしやるやうですね。何ならここで暫くお手本を見せて戴けないでせうか。」

「よろしい、承知しました。」

客はかう言つて、吃驚する娘に頓着なく、すつと帳場に入つて來た。そして身輕に外套と帽子とを脱ぎざま、今入つて來たばかりの婦人客の方へ愛嬌のある顔をふり向けた。

「毎度御鼻頂に預かりまして……今日は何か……」

「あたし洗濯の利く白手套が欲しいんですが……」

紳士は賣子娘に白手套のしまつてある棚を訊いた。そしてその中から二揃ひ持ち出して來た。

「いかがでございませう、このお品では。それから洗濯なさいます間、別なのがお入用だと存じます。」

「さうね、ぢや二つ戴きませうよ。」婦人客は白手套の二つを購ひ取つた。

「今一つこんなのを御覽に入りたいと存じます。」

紳士は先刻の棚から別の手套を持ち出して來た。

「御覽の通り、これは鼠色でございしますが、晝興行やお寺詣りにはこの方がお似合ひかと存じまして。何ならこれも二揃ひばかりお持ちになりましたは。」

婦人客はその鼠色の手套をも、言ひなり通り二つ購はされた。たつた一つの手套が買ひたさに店に入つて來たものが、出る時には四つの手套を掲げてゐた。それもほんの十分間の出來事に過ぎなかつた。

お客が歸つてゆくと、賣子娘はすつかり感心したらしく言つた。
 「まあ、お上手だわね。貴方。これまで屹度どこかの賣子だつたんでせう。そしてお店へ雇はれたくつて、今日いらしたのぢやなくつて。」
 「さうかも知れません。」
 紳士は外套と帽子とを受取りながら言つた。そして紙入から自分の名刺を取り出して娘に呉れてやつた。それを見ると、娘は仰天して酸漿のやうに眞紅になつた。紳士は擬ふ方もないワナメエカアの主人だつた。

詩人の健啖

話はずつと古くなるが、伊太利の詩人ダンテが、ある時カーネ・デラ・スカラ家の食事に招かれた事があつた。——世間の娘を持つた親達に告げておく。皆さんの知合にもしか詩人があ
るなら、精精御馳走する事だ。詩人は食卓で親達に色色のおもしろい談話を聴かせてくれるばかりか、娘には激しい戀を教へてくれるものだ。

ダンテは好いお客だといふので、わざわざ其家の主人と子息との間に坐らせられた。その頃の食事には、主人も客も食べ残りの骨を卓子の下に打捨うちすらかしておく習慣があつたので、悪戯好きのカーネ親子は、目ざとい詩人に氣づかれぬやうに、自分達の皿の骨は言ふまでもなく、他のお客のをまで、そつくりその儘そつとダンテの足もとに捨てておいた。

さて食事が済むと、主人は初めて夫に氣づいたやうに皆の顔を見た。

「皆さん。私はダンテ君の胃の腑が、馬のやうに御丈夫なのにすつかり驚いてしまひました。お疑ひになるならあれを御覽下さい。」

主人はダンテの脚もとを指さした。皆は卓子の下を覗き込んだ。そこには食べ残りの骨が山のやうに積まれてあつた。

「ほほう。驚きましたな。ではこれから一つ詩人の健啖を祝さうぢやありませんか。」

お客の一人が言ひ出したので、皆は起ち上つてダンテの胃の腑のために杯をあげようとした。

「お待ち下さい。皆さん。」ダンテは両手で皆を押へつけるやうな眞似をした。

「あなた方は私の健啖なのに吃驚なすつていらつしやるやうですが、私はまた當家の御主人の胃の腑の廣いのに驚嘆してゐるやうな始末で、御覽なさい——」と詩人は主人の脚もとを覗き込んだ。「御主人の卓子の下には何一つ残つてゐません。私はかうして骨だけは食べ残しましたが、御主人はその骨までもすつかり鶴呑みにされてしまひました。」

皆は詩人の頓智のいいのに嘆賞を惜まなかつた。語を寄す。世上の健啖家。頓智さへあつたら、諸君は六人分の飯を食つたつて少しの差支もない。

詩人の握手

スキンバンといへば英國の名高い詩人だが、その愛讀者の一人に、何とかして一度この詩人と握手して、その心持を一生の思ひ出にしたいと思つてゐた男があつた。

その男は、詩人が毎朝のやうに其邊の森へ散歩に出かける癖があるのを聞いてゐたので、度々ここぞと思ふところへ待伏せして、漸と一週間目に、かねて寫眞版で顔肥懇のこの詩人が、

向うからてくてく歩いて來るのに出會す事が出來た。其の男は樹蔭から獵師のやうに飛び出した。そして慌てて帽子を脱いだ。

「ちよいと伺ひますが、あなたはスキンバン先生ぢやありませんか。」

詩人は變な顔をして、一寸うなづいた。

「それぢや、どうか握手させて戴きませう。」

男は脂ぎつた掌面を前に差し出した。その掌は詩人と握手するよりも、熊と掴み合つた方が恰好だと思はれる程大きかつた。

「うむ……」詩人は呻くやうな聲をして、少し後退りをした。まるで見知らぬ男の掌面に怖氣づいたやうだつた。その瞬間、件の男は詩人が聳だつたのに氣がついて、一段と聲を張りあげた。

「先生、私はあなたに握手がして戴きたいばかりに、一週間ばかり毎日のやうにここでお待ち受けてたのでございます。」

「ああ、さうでしたか。」詩人はにこりともしなかつた。そして瘦せた手を出して、其の男の大きな掌面を握つたが、その刹那小娘のやうに心持顔を赧くした。

「私はこんな事には一向馴れてないものですからな。」

話 題

茶 話 全 集

「近世雄辯學」の著者、トオマス・ライドが、共和黨の闘手として米國の議會で鳴らしてゐた頃の事、ある日仲のいい友達と二人で、ポオトランドのある俱樂部に往つた事があつた。

二人は外套室に外套を脱いで、かねて馴染の小ぢんまりした部屋に入つて往つた。そして香氣の高いココアを啜りながら、好きなお喋舌に語り耽つた。

ライドは無論好きな政治の事をたと話したが、政治の話が盡きると、法律の話をした。嘘ばかりで眞實の事がぼつちりしかない書物の事、男といふものを手帛のやうに掌面で揉みくしやにする女の事——さういふ事柄について、次から次へと話を續けたが、たうとう話題が切れ、二人は起ち上がった。

もとの外套室に歸つて、めいめい外套を着込まうとする際、ライドの友達は何ポケットに手を

突込んでゐたが、一寸不思議さうな顔をして、革表紙の大形の手帳をその中から引張り出した。

「何うしたんだらう。こんな見覚えのない手帳が僕の外套に入つてる。」

雄辯家は外套の袖に片手を突込んだ儘、奴風のやうな恰好をしてみた。

「誰か外の人か自分の外套と間違つて入れて置いたんだね。」

「何うしたもんだらう。」

「それはかうするんだ。まあ、君も一度外套を脱ぎ給へ。」ライドは先きに立つてまた外套を脱いだ。「丁度話題が無くなつて歸らうとしてゐたところだ。折角だから、この手帳を持つて往つて、この中に書いてある事で今暫く話して往かうぢやないか。」

二人は笑ひながら、また以前の部室へ後戻りをした。手帳にどんな事が書きとめてあつたかは私も知らない。

話 題

五十仙の損失

米國民主黨の政治家ブライアン氏が、こなひだ米國南部のある市へ講演に出掛けた事があつた。汽車がその市へ着くと、ブライアン氏は幾年か前に自分がそこへ来て、講演をした事があつるのを思ひ出した。

茶話全集

「どんな講演をしたか、想ひ出したいもんだな。」

この政治家は禿げあがつた前額を押へてじつと考へ込んだ。すべての講演家にはそれぞれ定つた出し物がある。知らないで、同じ土地で同じ出し物を繰返すなどは、餘り氣の利いた話ではなかつた。

自動車はこの政治家を載せて、講演會のある大きな建物に走つた。そして廣々とした玄關前にびたりととまると、ブライアン氏は以前の會場もやはりここだつたなと思つた。そこに衝立つてゐた門番の爺さんは、にこにこもので出て来て、叮嚀に白髪頭を下げた。

「これは、これは。旦那様でいらつしやいますか。お久し振にお目に懸ります。」

その瞬間、ブライアン氏の頭に一筋の光明が射した。で、この雄辯家は今日まで自分の方も相手の皺くちやな顔をよく覚えてゐたやうな調子で話しかけた。

「お前も達者でいいな。確か以前私がここにやつて来た事があつたつが、あれからずつとこちらに勤めてゐるのかい。」

「はい。よく覚えとりますでございます。」爺さんはまた頭を下げた。「あの頃からずつと引續いて勤めさせて戴いとります。」

「さうだつたか。ところで……」とブライアン氏は眩しさうな眼つきで爺さんの顔を見た。「お前覚えてはゐなからうね、あの折私が此處で何をやつたかつて事を。」

「はい、はい。よく覚えとりますでございます。」爺さんは溶けさうな顔になつた。「旦那様はあの折、手前に五十仙下さりましてござりまする。」

ブライアン氏は仕方がなくポケットから五十仙を出して、爺さんの掌面に載せてやつた。——だが、以前の演題はたうとう思ひ出せなかつた。

文豪の娘

十九世紀の英國の作家のなかに、ジョン・ウイルソンといふ男がゐた。ブラックウッド雜誌に立て籠つて、クリストファ・ノウスといふ雅號で、何でもござれといった風に、いろんな方面に得意の才筆を振つた男だ。

そのウイルソンに美しい娘が一人あつた。女が妙齡になれば、いろんな男が訪ねて來るもので、この作家の應接間には、娘を目的の若い男が次から次へとやつて來た。そのなかに一人の若い大學教授が交つてゐたが、娘はこの男が氣に入つて嬉しい戀なかになつた。

大學教授は愈々結婚を申し込まなければならぬ順序となつたが、残念な事には、この學者は内氣な羞恥家で、他人の書物に書いてある事を紹介する折にも、顔を赧めないで居られない程だつたから、自分の戀を打明けるには、酸漿のやうに心から眞紅にならない譯にゆかなかつた。

「私には逆も貴方の阿父様にお目にかかる勇氣がありません。」大學教授は娘の家の應接間で、もうすつかり紅くなつてしまつた。「どうか、貴女御自身で言つて下さい、後生ですから。」

「阿父様？阿父さまなら、今書齋にいらしつてよ、往つてらつしやいな。」

娘は幾らか調弄ひ氣味に平氣な顔をして言つた。

「とても、とても。私がお目に懸つたら、却つてとんちんかんの御挨拶をしまひますよ。」若い學者は深い溜息をついた。「貴女往つて打明けて下さい。私はここでお待ちしてゐますから。」

文豪の娘

娘は笑ひ笑ひ父の書齋に入つて往つた。父は卓子にもたれて何か頻りと書きなぐつてゐた。娘は嬌へるやうに父の手をとつた。そして教授がたつた今自分に結婚を申込んだ事を話した。

「あの方は大層内氣でいらつしやるから、御自分には阿父様に申しあげかねると——こんなにおつしやつてたわ。」

「さうか。そんな方だつたら、叮嚀に氣をつけて上げなくちやなりませんぞ。」

作家は娘の顔を見ながら言つた。

「それぢや、口づからも何だから、紙片に返事を書いて、針でお前の背にとめておくとしませ

う。」

作家は机上の紙片を取つて何か書いた。そして態々それを針でもつて娘の背に縫ひとめた。

「阿父様の御返事は私の背に書いてあつてよ。」

娘は上機嫌で應接間にかへつて來た。内氣な教授は後方にまはつて見た。紙片には、

「謹呈 作者より」

と書いてあつた。

運

むかし、英吉利にダヴキツト・ヒユウムといふ懷疑派の哲學者があつた。或日エヂンバラの市街を歩いてゐる時、どうした機みか橋から滑り落ちて、沼に陥つた事があつた。馬のやうな正直者すら、偶には橋から滑りおちる事のある世の中だ。哲學者が沼にはまるのに少しも不思議はない筈だ。

ヒユウムは蛙のやうな恰好をして、泥潭ぬかるみのなかを泳ぎまはつた。不信心な哲學者に當てつたやうに、その日は誰ひとり橋の上を通りかかる者がなかつた。

ヒユウムは人生問題の研究も何もかも忘れてしまつて、身體ぢゆう泥だらけになつて跳いたが、さて何うする事も出来なかつた。

やつと時が経つて、一人のお婆さんがそこを通りかかつた。哲學者は蛙のやうに沼のなかから泣き聲を立てた。

「お婆さん。ちよつと手を貸しておくれ。先刻からここに落つこちて困つてゐるんだ。」

お婆さんは信心深い女で、平素から教會で人を助け上げるのは大層立派な行ひだといふ事を教はつてゐた。それが溝からであらうと、墨汁壺いんきからであらうと、そんな事は同じであつた。

婆さんは前屈みに手を伸ばしたが、ひよいと泥の中に立つてゐる男の顔を見ると、慌てて手を引つこめた。

「お前さんはヒユウムさんぢやないかね。」婆さんは残り少なの齒を狗のやうに露ひいてみせた。

「平素神信心をしない罰だよ。いいえ、善い罰だよ。幾ら助けたいにも、お前さんだと知つちや助けられないぢやないか。」

懐疑哲學者はべそを掻き出しさうな顔をして、婆さんをふり仰いで見た。

「まあさ、そんなには言はないで手を貸しておくれよ。私だつて神信心しない事があるもんかよ。」

「いや、信じなさらぬ。その證據にはいつもマリア様の悪口を言つてゐなざる。」

「いや、違ふよ。私は實際信心家なんだ。」

泥だらけの哲學者は、哲學が到底自分を助けてくれないものと氣がつくと、その儘泥だらけの信心家になつてしまつた。

「それぢや、そこで羅馬教の掟を讀みあげてみなざるがいい。さうすりや助けないものでもない。」

「讀みあげるともさ。ぢや、お聴きよ。」哲學者はビスケットのやうに乾いた唇で、うる覺えの信仰箇條を讀みあげた。すると、婆さんはやつと安心したやうに手を出してヒュウムを引張り上げてくれた。

共和國になりかからうとしてゐる波蘭では、その最初の大統領に洋琴家のパデレウスキイを選んださうだ。パデレウスキイは何といつても、今では世界切つてのピアニストで、旅行をする折にも手が硬ばると可けないからといつて、ピアノを汽車のなかに擔ぎ込んで、閑さへあれば鍵盤を打つてゐる人である。辯護士出の政治家でなければ、政治の實際が判らないものやうに思ふのは、舊い時代の習慣に囚はれた人達の事である。世界の政治と生活との様式が、根本から改造せられかかつてゐる今の時代には、統治者が理想家であればある程、目まじしい國民的飛躍が成し遂げられようといふものだ。この意味においてパデレウスキイの大統領は、必ずしも不適任だとは言はれない。

奥太利の音楽家モツアルトがある日の事、維也納の市街をぶらついてゐると、變な姿をした乞食がひよつくり眼の前に現れた。乞食は問はず語りに、色々な哀れっぽい身の上談を話し出

音楽家の大統領

した。すべて乞食の身の上談といふものは、聴き手が乞食でない限り、なかなか面白く聴かれるもので、談話が済むと、どんな人でもがついお鳥目はずみたくなるものだが、生憎な事に、モツアルトは其の折懐中に少しも持合せてゐなかつた。

音楽家は空つぽのポケットに両手を突っ込んだまま、乞食の方へ一寸顎をしゃくつて見せた。二人は連れ立つてそこの珈琲店に入つて往つた。音楽家は暖い珈琲と菓子の一皿とを乞食に配あてがひながら、自分は卓子に凭りかかつて、せつせと作曲に取りかかつた。乞食が野鴨のやうな口もとをして珈琲を啜つてしまふ頃には、立派な舞踊曲ミニユエトの一つが有り合せの紙片に書き綴られてゐた。

「あひにくと、今日は持合せが無いので、こんな物を拵へてみた。書肆ほんやへ持つて往つたら、幾らかになるだらうよ。」

モツアルトはかう言つてその紙片を手渡しした。

乞食はもう一杯珈琲が飲みたかつたのを辛抱して外へ出た。そして幾らか氣遣ひながら、その紙片をそこの書肆に持ち込むと、書肆の亭主はそれを見て、にこにこもので甘圓ばかしの原稿料を渡してくれた。乞食は物貰ひに次いで、音楽家ほど割のいい仕事はないと思つたらしかつた。

パデレウスキが大統領になつたら、生活に困つてゐる人達は訪ねて往つて、身の上話をしてみるのもよからう。よしんば樂譜を呉れないにしても、相手は藝術家の事だ。何か屹度氣の利いた言葉でも聴かせてくれるに相違ない。氣の利いた言葉は、金にならないまでも、薬にはする事が出来る。

三 弗 で

罪のない子役のませた動作は、涙脆い棧敷の婦人客を直ぐ泣かせる事が出来るので、横着な興行師や俳優たちは、成るべく年端の往かない、柄の小さい子役を舞臺に立たせようとする。

波蘭生れのピアニスト、ヨセフ・ホフマンは六歳の時に初演奏をしたといふ程あつて、早熟者の多い音楽家のなかでも、とりわけ早熟の天才として名高い男だ。演奏をしに米國へ渡つたのは、確かに十歳頃だつたと覺えてゐるが、悪戯盛りの子供が、汗を垂らして難曲に無中になつ

てゐる容子が餘りにいぢらしいといつて、幼兒虐待防止會から抗議の申込があつた程だつた。そのホフマンが（無論大人になつてからの事だ。）ある時、往きつけの料理屋で晩食を食つた。勘定を済ましてそろそろ出掛けようとする、向ふの卓子に居た五六人の客のなかから剽輕者らしい一人の男が呼びかけた。

「ちよいと、ホフマンさん。暫くお待ち下さい。」

音楽家は黙つて後方を振りかへつた。そこには五六人の客が居合はせたが、誰一人見知り越しの男は居なかつた。剽輕な男は卓子の上から身體を伸しぎま、ホフマンに言つた。

「よくお待ち下さいました。別に用事と言つては無いんですが、もしか私が今お喚びとめしなかつたら、貴方はどこまで眞直にお出かけになるお積りだつたんです。」

皆は聲を揃へて笑ひ出した。剽輕な男は名高い音楽家に調弄つた嬉しさに、鼻をくくんん言はせて喜んだ。

ホフマンは睫毛一本動かさうとしなかつた。棒杭のやうに突立つて、じつと剽輕な男の顔を見つめてゐた。そこらの卓子に居合はせた人達は、じつと鳴を鎮めて、この音楽家の返答を待つてゐた。ホフマンは静かな聲で言つた。

「よくお喚びとめ下さつた。世界中に私が喜んで呼びとめられるのは、先づ貴方位のもんでせうよ。」かう言つて、音楽家はポケットから財布を取り出して見せた。「御覽の通り、ここに三弗入つてます。この金で往かれるところまで往くのでさ。」

馬の慈善

波蘭の滅亡を讀んだ事のある者で、國士コスチウスコオの思ひせまつた苦衷に、涙を流さないものはたとあるまい。

コスチウスコオは性來慈悲深い男だつた。慈悲深いといふのは、美しい指環のはまつた手で慈善音樂會の切符を押賣する事を言ふのでは無い。場合によつたら、他人のために其の美しい手から血を流す事をいふのだ。

コスチウスコオがある時、隣り村の僧侶さんの許へ葡萄酒の進物を送らうとした事があつた。その使者として馬丁が呼び出された。馬丁は御主人の命令で、其の飼馬を引き出して夫に

乗る事にした。

馬丁は葡萄酒の罎を引つ抱へて、鞍の上で大威張に踏ん反りかへつてゐた。一體馬の尻について歩くのと、馬の脊中に反りかへつてゐるのとでは、大分人生觀が異つて來るもので、馬丁は哲學書の二三冊も讀んだらしい氣取つた顔で、じろじろ附近の人を見下してゐた。

すると、町の角から貧乏人が一人のそのそ這ひ出して來て、馬の側に立つた。

「旦那、お手の内を戴かせて貰ひませう。」

馬丁は素知らぬ顔で外つ方を向いてゐたが、馬はそこに突立つて一足も前に乗り出さうとしなかつた。で、馬丁は無けなしの財布から幾らか摘み出して、貧乏人の掌面に載せてやつた。すると、馬は納得したやうにぼかぼか歩き出した。

物の五丁と歩かないうちに、馬丁の財布は空つぽになつた。でも、馬は貧乏人と見ると、立停つて動かないので、馬丁もたうとう善い事を發明した。それは何か知ら、施しを呉れてやる眞似をする事で、さうすると、馬は安心をしてまた歩き出した。

馬丁は使ひ先から歸つて來ると、いきなり旦那の室へ駈込んで來た。

「旦那、もう貴方様の馬に乗る事だけは御免を蒙りやす。たつて乗らなければならぬものな

ら、旦那の財布も一緒にお貸しなすつて下さい。」

コウチウスコオが、貧乏人さへ見れば施しを呉れてやつたのは、別段賞める程でもないが、馬が何々伯爵夫人などと一緒に、貧民救助が好きだつたのは偉いと言はなければならぬ。馬が華族でなかつたのは何よりも残念である。

英國首相の恐縮

英國の首相ロイド・ジョージ氏が、まだ田舎辯護士でびいびいしてゐた頃、ある日訴訟用の出先から、一頭立の輕馬車を驅つて、自宅に歸りかかつてゐた。もう半時間もしたら、自分の住つてゐる田舎町に入らうとする頃、彼は寂しい野道で、とぼとぼと歩いてゐる一人の小娘に邂逅つた。よく見ると、同じ町にゐて、かねて見知越のある商人の娘だつた。

ロイド・ジョージは車を停めて、娘をも一緒に乗せてやつた。馬は一日駆けざり廻つて、もうかなり疲れてゐるので、情深い主人の仕打を變な眼つきで見えてゐた。實際娘を曳いて歸るの

は馬の仕事だったが、さうかと言って馬が慈善家だと賞められる譯でもなかった。従来も馬は度々そんな目に出會つて懲りてはゐたが、それが世間だと絶念あきらめをつけてゐるらしく、黙つてまた驅け出した。

未來の英國首相は、娘を喜ばせようと思つて、色々の談話を持ち出した。角のある龍や、乾魚のやうに瘦せた學校教師や、白鳥のお嫁になつたお姫様や、そんな面白い話を幾つとなく聽かせたが、娘は黙つて聽いてゐて、時々「はい」とか、「いいえ」とか應答をするに過ぎなかつた。ロイド・ジョオジは變に思つて、終ひには自分も黙つてしまつた。

二三日経つて、ロイド・ジョオジは娘の母親に出會つたので、その折の事を話し出して訊いてみた。

「お宅のお嬢さんは、よつほど沈黙家ひそめでいらつしやるんですね。」

「まあ、先生、その事なんですわ。」と母親は笑ひ笑ひ言つた。「娘が歸つて来て、其のお話をするもんですから、何だつてお前そんなに黙つてたんだと訊きますとね、娘の返事はかうなんですよ。」

「『だつて、お母さん。あなたあの叔父さんとお話をなさると、いつでも鑑定料とかいふものを取られていらつしやるんでせう。でも、私その折お金を一文も持つてなかつたんですもの。』と言つてね。」

未來の首相は頭をかいて恐縮した。——語を寄す、日本の辯護士連。ついでに君達も恐縮した方が善くはなからうか。

牛の價

亡くなつたルウズヴェルト氏が、ずつと以前紐育州の知事をしてゐた頃、一人の農夫爺をよく知つてゐた。ル氏は毎日馬に騎つて役所に出掛けたものだが、農夫爺の家はその途中にあるので馬に騎り倦いたル氏は、時々鞍から下りて爺さんの家で休んだりしたものだ。

ある朝、ル氏がいつものやうに馬に騎つて出掛けると、爺さんは窓に凭れて、紐育の新聞を讀んでゐたが、豫て聞き馴れた馬の蹄がぼかぼか鳴るので、じつと眼を離して外を見た。街道には利かぬ氣の知事が、笑顔をして馬に跨がつてゐた。

「よい所へ御座らつしたな、檀那……」爺さんは窓から巖丈な身體を乗り出すやうにして言った。「ちよつくら檀那にお訊き申すべいが、市の新聞つてえ奴は、えら嘘吐くだね。」

「嘘を吐くつていふのか、新聞が。」ルウズヴェルト氏は蟹の様に蟹めつ面をした。「何だつてそんな事を訊くんだな。」

爺さんは窓越しに今まで読んでゐた新聞を見せて、何處かを太い指頭で押へるらしかった。

「私わたつた今讀んだばかりだが、ここにこんねえな話が載つとるだよ。何でもはあ、市の富豪かねもちが牡牛一匹の畫に、一萬四千弗とか拂つたつてこんだ。嘘吐くにも程があるだよ。」

茶話全集

「何だつて、夫が嘘なんだ。」

ルウズヴェルト氏は可笑しさに訊いた。馬は牡牛が法外の値で取引されたのを聞くと、何だか面白くなささうな顔をして、頻りに瞬きをしてゐた。

「何だつて、檀那樣……」農夫は解りの遅い知事をもどかしがるやうに聲を高めた。「なんぼ廣い紐育の市だつて、まさか牛乳の絞れねえ牡牛に、大枚一萬四千弗もおつぱり出す馬鹿者も御座りましねえからの。」

吝嗇の競争

俳優中村梅玉の樂みは、金を蓄めると、夕方庭の石燈籠に灯を入れて、ゆつくりお茶を啜ると、この二つださうだ。尤も梅玉は石燈籠の灯を、いつまでも點燈しあかしにするやうな贅澤な眞似はしない。いい加減見て娛しむと、自分で起つて往つて、ふつと灯を吹き消してしまふ。

英國の富豪にトウマス・ガイといふ男があつた。俳優はしなかつたが、梅玉と同じやうに金を蓄める事は大變好きだつた。聖書の出版を始めて、しこたま懐中を膨らましただけあつて、かなり慈善事業にも手を出したが、聖書に書いてある事をそつくり實行もしなかつたと見えて、金は溜る一方だつた。

同じ頃ホプキンスといふ儉約家があつた。恐ろしい吝嗇家しみつたれで、金を蓄めるためには、どんな苦しい思ひをするのも厭はなかつた。もしか「靈魂」を銀貨一つに取替へて呉れるものがあつ

たら、ホプキンスは喜んで「靈魂」を賣物にしたかも知れなかつた。

ホプキンスは、英吉利中で自分程儉約な者は無からうと思つて、夫をたつた一つの自慢にしてゐたが、他人の噂に聞くと、トオマス・ガイといふ男は、自分にも劣らない程の吝嗇家らしかつた。さういふ吝嗇家が此の世に今一人住んでゐるといふ事は、ホプキンスに取つて生き甲斐がある事に相違なかつた。ホプキンスは態々ガイを訪ねてみようと思つた。

ガイを訪ねたのは夜分だつた。主人は墨汁壺いんきつのやうな眞つ暗な部屋にもぐもぐしてゐたが、客が來たと氣がつくと、のっそり立つて往つて、蠟燭に灯をつけた。蠟燭は黃疸病みのやうな黄色い光を四邊に投げた。その瞬間ホプキンスは入口に立つて叮嚀にお辭儀をした。

「ガイさん、貴方にはすつかり參つちましましたよ。私だつて蠟燭の儉約までは思ひつきませんでした。いや、有難うございました。」

ホプキンスは幾度か頷きながら、そのまま歸つて往つた。

労働者としての鼠

世の中に鼠はどうるさい物はないが、何事にも儉約な蘇格蘭のハトンといふ男は、近頃普通の家鼠を馴らして絲紡ぎをさせる事を思ひ付いた。

ハトンは自分の物置の隅つこから、鼠をたんと驅り集めて、色々試してみると、大抵の鼠は一日平均十一哩半は走れる。なかには平氣で十八哩も走れるのがあるといふ事を發見した。

「こんな速力を持つてるものを、むざむざ天井裏ばかり駈けさせとくのは勿體ない。」

とあつて、夫を絲を紡ぐに利用する事を考へ出したのだ。

鼠も絲を紡いでみれば、いつぱしの労働者である。労働者には夫々生活を保證してやらなければならぬ。所で、鼠の餌は大分安上りで、この労働者ひとり丁度宜い加減に肥らせるには、四週間にざつと六錢のオートミールを食べさせれば夫で十分で、その間に鼠は三百六十二哩ほど走つた。

ハトンはこの小さな労働者を收容する紡績小屋を建てた。そして仕事に掛らせてみると、鼠はこまめに立働いて、一日に百本から二百二十本の糸を紡いだ。で、根氣よく一箇年ほど、この工場の仕事を續けてみると、五週間に六錢の食費で鼠一匹の稼ぎ高が、廿五吋の長さの糸を三千三百五十本紡いだといふ勘定になつた。

普通の紡績職工に拂ふ割合で、鼠に賃金を仕拂ふ事になると、ざつと一週間に六錢を遣らなければならぬのだから、五週間に六錢の食費で済むと、差引四週間分だけは只儲けといふ事になる。で、機械や小舎の修繕などを見込むと、鼠一頭の純益が一年に三圓はあるさうだ。

畫の接吻

サアゼントといへば、女優のエレン・テリイがマクベス夫人に扮装した、あの名高い畫の作者だと知らぬものもないが、この畫家がシャヴンヌやエドキン・アベエなどと一緒に、暮斯敦の公立圖書館の裝飾畫を頼まれて、米國へ渡つた事があつた。

其の折サアゼントは、ある知合の午餐會に招かれて往つて、ひどく自分を崇拜してゐる一人の娘に出會つた。娘は食卓越しに、じつと此畫家の姿に見惚れてゐたが、暫くするとやつと重い口を開いた。

「先生。あたし先日ある所で貴方の御製作を拜見して、覺えず繪を接吻しましたわ。」

「ほほう、何だつてまた接吻などなさいましたね。」

畫家は幾らかお愛想のつもりで訊きかへした。

「だつて、そのなかの一人が先生にそっくりなんですもの。」

娘はかう言つて、皿のなかの櫻んぼのやうに紅くなつた。

「それは有難う。」畫家は一寸頭を下げる眞似をしたが、急に眞面目くさつた顔になつた。「そして其の畫が御返禮に貴女を接吻でも致しましたか。」

「いいえ、先生。だつて、相手は畫なんぢやございませんか。まさか……」

娘は蓮葉に額で一寸睨めるやうな眞似をした。

「まあ、然うでしたか。そんな失禮な事を……」畫家はにやにや笑ひ出した。「それぢやお嬢さん、私にそつくりだとは言へませんよ、私だつたら……」

と、今でも喜んで接吻をしさうな顔をした。

子供の少い村

女といふものは、男の悲しみは半分別けて呉れる。喜びは倍にして呉れる。そしておまけに費用は三倍にして呉れる。——といふ程、男にとつて無くてならないものである。もしか世界に女が一人も居ないといふ事になると、それは男にとつて神様が一人も居ないといふ以上に大事件でなくてはならない。

ところが、さういふ村が米國に一つある。カンサス州のエムボリア市から少し離れた片田舎だが、そこにはこの十年間が程女の兒が一人も生れない。出来る兒も、出来る兒も、やくざな石塊のやうな男の兒ばかりなので、村では地方出の代議士に頼んで、男でも女でも自由に産む事の出来る秘法を説いた書物はないものか、有るならこつそり教へて貰ひたい。もしか無いならば、専門の學者に研究させて貰ひたいといふ、大變な陳情をしたといふ事だ。

この村には百八十二軒の家庭があるが、ここ十年が程に生れた子供は、すべてで二百十二人で揃ひも揃つてやくざな男の兒ばかり、女といつては唯一人しかない。それがやつとまだ九つにしかならないのに、婚約の申込が降るほどあるといふ事だ。

フランシス・ウイルソンといへば、米國では聞えた俳優だが、この男がある夏の事、田舎に旅立ちして往つた。ところが、その田舎といふのが、不思議に子供の少い村で、晝間でも遊び聲一つ聞えない、ひつそりした村であつた。(どこの國へ往つても、馬鹿と子供と鶏とは騒々しいものである。)

フランシスは宿の農夫をつかまへて訊いた。

「爺さん、この村では子供は餘り居ないと見えるね。」

「居ましねえだよ、孩兒は。」

爺さんは安煙草の脂臭い口をして言つた。

「餘り生れないのかな。」

「あんまり生れねえだよ。」

「どんな割合で出来てるか知ら。」

食事の流儀

藤田東湖が刺身を食べるのに、いつも掌面に載せてべろりと嘗めてゐたといふ事は、いつぞやの茶話に書いたやうに覺えてゐる。佛蘭西の諺に、

「蚤を殺すには、それぞれ流儀があるものだ。」

といふ言葉があるが、蚤を殺すのに流儀がある位だったら、食事をするのにも夫々儀式をもつてゐたつて少しの差支もない。

西洋料理を食べるに、肉叉ふちくを使はないで、何もかも肉刀たいふで片づけてしまふ人がよくある。

「まあ、何て不作法な人だらう。お行儀な西洋人に見せたら屹度笑はれてよ。」
宗教學校出の婦人だったら、そんなのを見て酸漿のやうに顔を紅くするかも知れないが、し

かし、夫は物を知らないからで、お行儀な西洋人にも、肉刀で物を食べるのは少くない。阿父アヂの大事な櫻の木を伐つて、嘘一つ吐き得なかつたジヨオジ・ワシントンが先づそれで、食事をするにはいつも肉刀で済ましてゐた。アメリカの六代目大統領ジョン・クインシ・アダムスは、國祖のそれとは違つて肉叉で食事をしたので、夫人はそれが氣がかりでならなかつたものか、お客があると極つたやうに、

「御免遊ばせよ。宿はながらく巴里に居ましたので、つひ彼地あちらの癖がつきましてね。」

と、言譯がましい事を言つたものだ。それが代變りになつて、七代目アンドリウ・ジャクソンになると、またワシントンなみに肉刀で皿を啄つき出した。

越後の良寛上人が、ある時濃茶の席へ招かれて往つた事があつた。どんな場合にも無頓着だつた上人は、上客から茶碗を受取ると、一息になかの濃茶を口に含んでしまつた。だが、その一刹那、自分の次ぎにもまだ一人客のゐる事に氣が注いで、今飲んだばかりの茶を、また茶碗のなかに吐き出して次に廻して來た。

客は茶碗を受取つた。そして低聲で、

「南無阿彌陀佛……」

と念佛を唱へながら、眼をつむつてぐつと一息に嘸み下した。客が何のためにお念佛を唱へたかは私の知つたことではない。

農夫の自慢

米國のダコタ在生れの農夫が、最近英國へ旅をした事があつた。農夫といふものは、蚯蚓のやうに土地にこびりついてゐるだけに、得て在所自慢をしたがるもので、この農夫もかねて顔昵懇の英吉利の農夫を見ると、すぐに生れ故郷の自慢話を持ち出したものだ。

「斯う云つたつて、眞實にはさつしやるまいがね、俺達の耕地ちふのは、素晴しく大いもんでね……」ダコタ生れの農夫は厚い唇をもぐもぐさせながら言つた。「春の初めに鋤を入れかけて、畦を負つ直に耕作を済ますのは、丁度秋のかかりだよ。歸り途にはそろそろもう收穫をせんならん程作物が大きくなつとるだよ。」

「そんな事もがすてせうな。」英吉利生れの農夫はわざと落つき拂つて言つた。「俺の友達が一

人印度に居るだが、何でもその話によると、向うでは畑を抵當に借金をしようちふんで、持地をぐるり一廻り檢分して歸ると、もう借金の返濟期になつとるので、いつ迄待つても金の借りやうが無えちふ事だよ。ははは……」

二人は聲を揃へて笑つた。暫くすると、ダコタ生れの農夫は少し笑ひ過ぎたやうに急に眞面目な顔になつた。

「そんだら、はあ、丁度俺が娘聲の持地とおつつかつただに見えるだね。」農夫は面と向ふ折にはこつびどく面當を言はないではおかない同じ口で、自慢さうに娘聲の噂を始めた。「俺が娘聲ちふのは、二週間前に結婚しただがね。その翌る朝馬車に乗つて牧場に出かけたもんだ。毎日毎晩持地のなかをとつ走つて、やつと牧場に着いた頃には、もう子供二人が生れとつただよ。」

英吉利の農夫は一寸頭へ手をやつた。そして何かそれにも負けないやうな法螺を考へてゐたらしかつたが、たうとう考へつかないで、感心したやうに深い溜息をついた。——嘘のやうだが、これは近刊の英字雑誌に載つてゐるまつたくの事實談である。

何故食物が高い？

米國ではこの頃食料品が高くなつたので、あつちこつちで頻りと不平の聲が聞えてゐる。先日も前大統領タフト氏が田舎へ旅行して、途中で道連になつた農夫を相手に、近頃農産物の値段が籠棒に高くなつた事を話して、

「まるで以前の三倍もの値がするのだからやりきれない。」

と呟いた事があつた。そして相手の農夫が値上げの張本人であるかのやうにじつとその顔を見つめた。

農夫は象のやうな大きな圖體のタフト氏を見返ししながら、濟まなささうに頭を掻いた。實際食料品がかう高くなつては、一番困るのは馬か、タフト氏かのどちらかに相違なかつた。

「でも、お前様。小麥が高くなつたのは、小麥自身が高くなつた譯ぢやござりませぬだよ。」

農夫は言ひ譯がましく口を切つた。「あれはその、學問の値段が入つてゐるからでござります。」

今時の農夫はお前様方と同じやうに、いろんな事を知らなくつちやなりませぬからなの。

「學問の値段といふと——」タフト氏は腑に落ちなささうに眉を蹙めた。「そんなものが、何だつて小麥や馬鈴薯の値段に影響して來るんだね。」

「だつて考へて御覽じませ。」農夫は節高な頑丈な手をタフト氏の鼻先で振りまはした。「今の農夫は往時むかしと違つて、自分達の畑から上る物の、植物學とやらの名前をも知らなくつちやなりませぬ。それから浮塵子や根切蟲だが、そんねえな無益物やくまものの昆蟲學とやらの名前をも覺えなくつちやなりませぬ。その上に肥料の化學的成分とやらも、すつかり頭に入れておかなかつちやなりませぬのだからな。何だつてお前様、それにはみんな錢がかかりまするだよ。」

「さうか……」と言つて、タフト氏は解つたやうな、解らぬやうな顔をして、その儘黙つてしまつた。

肉代五弗也

米國の華盛頓であつた事——ある日、土地で名高い判事のKといふ男が、豫て顔肥癩の肉屋の店さきを通りかかると、てつぷり肥つた店の主人が、いつもの愛嬌笑ひをしいしい、

「一寸……」

と言つて呼びとめた。

判事は立ち停つた。肉屋の主人といふのは、いつも剽軽な世間の噂を聞かせてくれるので、大抵の場合その店先で立ち停つても損はしなかつた。

「お呼びとめして相済みませんが、一寸旦那に伺ひたいと思ひやしてね。」肉屋の主人は軽く頭を下げた。「肉を盗まれましたのは、法律上どんな手續をしたもんでがせうな。」

「肉を盗まれたのか。夫は告訴しなくちやならん。打棄つとくと、癖になつて可かんからね。」判事は肉の事なら、直段からビステキの味加減まで、法律でどうにでも出来ると考へてゐる

らしかつた。

「まつたく癖になつていけやせん。」肉屋の主人は二三度軽く頷いた。「ところが、盗んだ奴が人間ぢやないんで困つてしまひやす。」

「人間ぢやない。何だね。それでは。」

「狗なんてげす。」

「狗だつて、そんなら飼主から肉代を辨償させるまでの事さ。」判事は何でも彼でも法律で押し通したいらしかつた。「そんな狗を飼ふなんて怪しからん事だ。」

「ところが、旦那。その狗つてえのが、お宅の斑なんてげす。」

肉屋の主人は氣の毒さうに揉み手をしながら言つた。

「宅の狗か。」判事はだしぬけに途の眞中で鼻を抓まれたやうな顔をした。「それぢや仕方がない。盗まれた肉代は幾らだつたね。」

「お氣の毒さまですね。五弗でげす。」肉屋は町寧に頭を下げた。

判事はねぢ曲げたやうな笑ひ方をしながら、懷中から五弗取出して、肉屋に拂つた。

それから二三日すると、肉屋の店に、件の判事から仕拂請求書が來た。主人はげんさうな

顔をして封を切つた。なかには、

牛肉盗難事件
鑑定料五弗也
右請求候也

と認めてあつた。肉屋の主人は舌打をして五弗を仕拂つた。

愛國心と胃の腑

獨逸の鐵血宰相ビスマルクが、ある時ウイルヘルム老帝の御馳走になつた事があつた。その折の献立がどんなだつたかといふ事は、他人の食膳にあまり興味を持たない私の知らない事だが、唯一つその時卓子の上に載つかつてゐた酒が、三鞭酒だつたのはよく知つてゐる。

ビスマルクは自分の洋盃に注がれた三鞭酒に唇をやつた。その唇は自分の戀女房を接吻する外には、いろんな國の外交官を相手に嘘ばかりを言つてゐたが、それでも酒の味はよく判つた

ものだ。ビスマルクは一吋洋盃の縁を嘗めると、その一刹那肩の上に太い皺をよせた。皺は低聲で、

「不味い。何といふ不味い三鞭酒だらう。」

と呟いてゐるらしかつた。

ビスマルクは太い手を伸ばして、卓子の上に置かれた三鞭酒の壺を引き寄せた。こんなに不味くてゐて、平氣で帝王の食卓に上つてゐる酒壺が、どこの出來だか一寸見て置きたかつたのだ。酒壺は白い手帛で包んで、わざとレッテルを隠してあつた。ビスマルクは眼をあげて老帝の顔を見たが、その一刹那老帝が石版畫のやうな眞面目な顔をして、じつと宰相を見かへしてゐるのに氣が注いた。

「陛下。ちよつとお伺ひ致しますが、この三鞭酒はどこの産てまてでございます。」

ビスマルクは手帛に包くまつた酒壺をさしながら訊いた。

「どこのでもない。」老帝はいつに似ぬ堅い調子で返辭した。「わが獨逸國で出來たのだよ。」

「道理で、ひどく不味いと思ひました。」ビスマルクは獨語のやうに言つて、英吉利生れの婦人でも見るやうに、馬鹿にした眼つきで其の酒壺を見た。

「不味いかも知れん。」老帝は唇の端に心持微笑を浮べた。「だが、朕は愛國心で酒を飲むといふ事を知つとるからな。」

老帝の皮肉に宰相も黙つてはゐなかつた。

「あひにくと、私の愛國心は胃の腑の入り口で停まつて居りますので。」

ビスマルクはかう言つて、胃の腑と愛國心との繼ぎ目でも示すやうに、心もち椅子の上に反りながら両手で横つ腹を押へた。

名 文 句

米國の勃士敦にペン先きの製造業者がある。數多い同業者を壓倒して、店のペン先きを賣り弘めようとするには、何でも廣告を利用する外には良い方法が無かつた。で、一千弗の懸賞附きて、ペンに關する獨創的な名文句を募集する事に定めた。

懸賞附きの廣告が發表せられると、方々から應募原稿が山のやうに集まつて來た。整理係が

汗みづくになつて、夫を取り調べてみると、なかに一通大判な用紙に、劍先で書いたかと思はれるやうな大きな文字で、

「ペンは劍よりも偉大なり。」

と認めてあるのがあつた。そして御叮嚀に附箋までして、

「一寸都合がありますから、懸賞金は電報爲替でお送り下さるやうに。」

と添へ書までしてあつた。

整理係はそれを見て、一寸調弄つてみたくなつた。で、早速手紙を出して、貴方の應募原稿は素晴しく立派に出來てゐるが、あの名文句が貴方の獨創であるといふ證據さへあつたら、懸賞金は直にお届けしようと言つてやつた。

すると、折返して返事が來た。一體直に手紙の返事を寄こす人には神信心の厚い、正直者が多いものだが、この應募者も察する所、正直者だつたに相違ない。返事にはかうあつた。

「私の送つた文句は、私が何處かで讀み覺えたものか、夫とも自分の頭から出たものか、はつきりとは申し上げられません、然し私は今日まで本といつては、國民讀本と舊約聖書の箴言しか讀んだ事ありませんから、この二つの本に無い文句なら、私の拵へたものとして差支ない

答です。重ねて申します。懸賞金を折返し電報爲替で送つて下さい。」
 だが、笑つては可けない。この應募者は讀本と箴言と——書物を二冊も讀んでゐる。書物を二冊も讀むといふ事は、日本では贅澤の沙汰だとしてある。

馬は美容に害あり

今朝の新聞紙をみると、若い女が馬に蹴られて死んだといふ事が載つてゐる。氣の毒な事だ。だが、注意しなければならぬのは、馬は女を蹴飛ばすのみならず、其の上に女を不纏織にさへすることである。蹴飛ばされて息が絶える位ならまだ辛抱も出来るが、不纏織にまでされては逆も溜つたものではない。美しいといふ事は、生命があるといふ事以上に大切なのを思ふと、馬は男と一緒に女にとつては目の敵である。

伊太利のヴェニスには美しい女が多い。世界中のどの都に比べても、美しい女にかけては決して負を取らない。何故ヴェニスに限つて、そんなだらうと理由を訊いてみると、醫學者の

返事は極はつきりしてゐる。それはヴェニスは音に名高い水の都で、馬が居ないからださうだ。大抵の都會では、ざつと十分おきには、屹度荷馬車ががたびしと地響きをさせて通るものだ。騒々しい其の物音は、人に厭な氣持を起させるばかりか、安眠を妨げる事が夥しい。安眠は何よりも容色を美しくするものだといふ事を思ふと、荷馬車の音も聞かないで、ぐつすり眠る事の出来るヴェニス女の美しいのに、何の不思議はない筈だ。

米國のある女學校で、生理の教師が、安眠は何よりも健康の藥だと言つて聞かせると、生徒の一人が立上つて質問をした事がある。

「先生。人間は一體幾時間ほど眠つたらいいんですの。」

先生は嚴べらしく答へた。

「男子が六時間、女子が八時間、そして馬鹿者が十時間。」

女生徒は嬉しさに叫んだ。

「いいわ。私女でゐて、おまけに馬鹿だから、これから十八時間眠る事にするわよ。」
 その小娘が世界中の一番纏織よしだつたか、どうかは私も知らない。

獨身主義者

アメリカにジオウジ・エエドといふ獨身主義の文士がある。そのエエド氏がある時知り合ひの結婚式に饗ばれて、列席した事があつた。

側にゐた近眼の某夫人は、エエド氏の顔を眼鏡越しにじろりと見ながら言つた。

「エエドさん。貴方は今だにお獨りていらつしやいますが、御結婚なさるよりも、其の方が道徳的だと思つてらつしやるんですか。」

「いえ、何う仕りました。」獨身文士は皮肉な眼つきで夫人を見かへした。「私の経験によりますと、獨身である男は、結婚した男よりも確に人が悪いやうですわね。」

「貴方もさう思つてらしつて。まあ、皆さん、お聞きなすつて、今のを。」

近眼の夫人は、勝ち誇つたやうに、居合はす夫人達の顔を見比べた。皆は急に蠟燭をともしたやうに明るい晴れやかな表情をした。

「エエドさん。」と一番年嵩らしい婦人が呼びかけた。「貴方がそれ迄に懺悔なさいますには、何か理由がお有りませう。聞かせて戴けないこと……。」

「お安い御用です。」エエド氏は洋盃の飲みものに一寸唇をあてながら言つた。

「何故といつて、奥さん、女房持ちの男が怖がるのは、たつた一人の女ですが、獨身者は女全體を恐ろしがるんですからね。」

梅の下かげ

出雲松平家の茶道に、岸玄知といふ坊主が居た。ある時松江の市街外れをぶらついてゐると、穢い百姓家の垣根に花を持った梅の樹が目についた。梅は大隈侯のやうに老齡としよりで、加之おまけにまた大隈侯のやうに杖に凭りかかつてゐたが、玄知はその姿が氣に入つたので、早速百姓に掛合つてみると、百姓は幾らか貪つた價を切り出した。

玄知は家に歸つて、これまで持ち慰んだ茶道具の幾つかを賣拂つた。そして金子を懷中に、

いそいそと百姓家を訪ねて往つた。取引が無事に済むと、玄知は腰にした瓢をほどいて、花の下で酒を飲み出した。百姓が夕方野良から歸つてみると、玄知は花の下で狗ころのやうに鼻を掻きながら轉寝をしてゐた。

それから幾日か経つたが、玄知は一向樹を持ち運ぼうともしないで、毎日のやうにやつて來るので、百姓は不思議でならなかつた。

「旦那。一體あの梅の樹はどうして呉れるだね。」

「どうもしないよ。あの儘さ。」玄知はけろりとした顔をしてゐた。

「だつて、お前様、高い金出して、俺がの買取つたぢやねえか。」

「さうさ、買取るには買取つたが、うちは邸が狭いから、いま迄通りお前の許に預けておく積だ。」

百姓は麥飯と水とで出來た自分の哲學では解き難いものに出會したやうに頭へ手をやつた。「預かれなら、預かりもしようがの、實が生つたら持つて往くだかね。」

「いや、實は要らない。」玄知はその梅の實のやうな圓い頭を掉つた。「乃公は花を見ればいいのだ。實はお前に呉れてやるから、精々樹に氣を注げてやつてくれ。」

「實は要らねえだつて。」百姓は眼を睜つて不思議な茶道の顔を見た。「俺實が生るから金を貰つただ。花見するだけなら、お前さんが幾度來たつて彼是叱言いふ俺でねえだ。金は返すだよ。」

百姓が金を取りに家へ歸らうとするのを、玄知は遽てて引きとめた。

「いや、止しにして呉れ。花がお前のものなら、幾ら見たつて面白くない。自分のものにして初めて熟々と見てゐられるのだから。」

百姓は自分の知らなかつた珍らしい嘘でも聞かされたやうに、胡散さうな表情をして首をふつた。

將軍の鼻

遣歐米軍の司令官、パアシング將軍の舅は、今米國のワイオミング州にゐる、地方切つての富豪である。州の首府シヤイエんにだけでも、四十六軒の家作を持つてゐる。それが孰れも素晴

しく立派なものづくめである。

そのシヤイエンの市街に、一人の老つた小學校の校長が住んでゐる。長い一生を振りかへつてみても、何一つ碌な事は仕出來してゐないので、此の頃では他と話す時には、いつもペアシング將軍の舅を自慢する事に決めてゐる。名高い將軍を娘婿に持つたばかりか、しこたま財産をさへ持つてゐる。何といふ幸福な男だらうと言つて。

ある時友達がこの老校長を訪ねて來た。校長は市街をぶらつきながら、途途將軍の舅の自慢話を持ち出した。すると、道の曲り角で大きな旅館の前に出た。校長は慌てて友達を引きとめた。

「見なさい。この建物も將軍の舅さんの所有でさ。」

友達は旅館の高い窓を振り仰いで感心した。

市街を曲るとその通りには幾つかのかつちりした會社向きの建物が立ち並んでゐた。こんな街に事務所でも置いて、株券の利廻りでも考へてゐたら、定めし氣持がよからうと思はれた。校長はその前に來ると、慌ててまた友達を呼びとめた。

「見なさい。この建物もみんな將軍の舅さんの所有でさ。」

次ぎの市街では、小ざつぱりした住宅向きの建物が幾つとなく目に留つた。こんな住居に入つて、家賃もきちんきちんと拂つて、加之に結婚しないで濟まされるものなら、此の世は天國だらうと思はれた。校長はその前に來ると、また立ち停つて言つた。

「見なさい。此の建物もそつくり將軍の舅さんの所有でさ。」

暫くすると、二人の目の前に、宏壯な、素晴しく金のかかつたらうと思はれる建物が現れた。

周圍には美しく刈り込まれた芝生があつて、色々の珍らしい花が咲いてゐた。友達は校長を振り向いて訊いた。

「立派な家ですな。誰方の所有ですか。」

「これですかい……」校長は自慢さうに鼻を動かした。「これが、その將軍の舅さんの宅でさ。」

そこから少し往くと、美しく鏡のやうに光つた湖水があつた。白い雲の一片が立ち停つて、女のやうに自分の姿をうつしてゐた。友達は景色に見惚れながら訊いた。

「いい湖水だ。誰のだらう。やつぱり將軍の舅さんの所有なんですか。」

「さあ。」老校長は行詰つたやうに頭へ手をやつた。「いや、那の方のぢや無からう。多分神様

の所有てがせうよ。」

「神様の……成程ね……」と友達は皮肉な眼で校長の汗ばんだ額を見た。「神様の所有にしても、いづれは將軍の舅さんからお買取りになつたのだらうが、どの位お仕拂ひになつたか知ら。」

魚を食ふ人

天龍寺の峨山和尚が、ある時、食後の腹ごなしに、境内の池の畔をぶらぶらしてゐた事があつた。池には肥えふとつた緋鯉だの、眞鯉だのが、面白さうに戯けあつて、時々水の上へ躍り上るやうな事さへあつた。

峨山和尚は立ちとまつて池のなかを覗き込んだ。世捨人の和尚の身にとつても、納所坊主の他愛もないお談議を聽いてゐるよりか、鯉の戯けるのを見てゐる方がずつと面白かつた。和尚は夢中になつてじつと見とれてゐた。すると、だしぬけに後から、

「和尚さん。」

と呼ぶ聲が聞えた。

和尚は後方を振向いてみた。そこには近所の悪戯つ兒が一人衝立つてゐた。

「和尚さん。あの鯉一尾わてにおくはらんか。」

子供は今和尚の目の前で水をうつつて筋斗とんぼがへりをした大きな鯉を指さしながら言つた。

「ならん。ならん。」和尚は木の株のやうな頭をふつた。「この鯉はみんな飼うたるのやさかいにな。」

「そない言はんと、一尾だけおくなはらんか。和尚さん。」

子供は嬌へたやうに和尚の袖を引張つた。和尚は笑ひ笑ひ袖を引き離した。

「いや、ならん、ならん。鯉を捕るのは殺生やよつてな。」

子供はわざと戯けたやうに、指先で和尚を突つく眞似をした。

「そない言うたかて、和尚さん、自分でこつそり捕つてはる癖に。」

和尚は眼を圓くして子供の顔を見入つたが、それでもどうと言ひ解くわけに往かなかつた。ベンヂヤミン・フランクリンは、僧侶ぼんさんのやうに素食主義で暫く押し通して來たが、ある

時、何かの折に魚を料つてみた事があつた。すると、その魚の腹から小魚が二三尾出て來た。「何だ、魚め、仲間同士で友喰ひをやつてるんだね。」フランクリンは腹の底から吃驚してしまつた。「そんなだつたら、何も遠慮するんではなかつた。」
それからといふもの、彼はふつとりと肉食主義を止めて、魚を食べ出した。そして鰹のやうに肥り出した。

婦人の病氣

醫者の診察室には、病人も來れば健康な人も來る。醫者は一々それを診て、病人には病氣でないやうな氣安めを、健康な人には病氣があるやうな言葉をかけなければならぬ。夫が出來ないと、その診察室は兎角評判がよくない。

英國にジョン・アバアネシイといふ名高い外科醫があつた。長らく聖バアソロミウ醫院に勤

めてゐたが、物言はずの沈黙家と不作法なのとて聞えた男だつた。ある時若い貴婦人がこの醫者の診察室に入つて來た。婦人の手首は一寸腫れ上つて熱を持つてるやうだつた。醫者は碌すつぽ診ようともしないで、ぶつきら棒に訊いた。

「熱りますか。」

「づきづき痛むんですわ。」

貴婦人は美しい眉を顰めながら言つた。

「晝法なさい。」

醫者は一言言つたきり、鉛筆のやうに衝立ち上つた。貴婦人は不安さうな眼つきをして歸つて往つた。

次ぎの日、婦人はまた診察室に入つて來た。醫者はじろりと横目で睨んだ。

「癒りましたか。」

「いいえ。昨日よか悪いやうですわ。」

貴婦人は狹ころのやうに悲しさうな目つきをした。

「もつと晝法なさい。」

醫者はさう言つた儘、この美しい患者を置いてきぼりにして外へ出た。それから二日目にまた貴婦人が診察室に入つて來た。今度は打つて變つて、世界が花びらになつたやうな笑顔をしてゐた。醫者は訊いた。

「癒りましたか。」

「はい、お蔭ですつかり快くなりました。」

婦人が象牙のやうな手首をつきつけるのを、醫者は見向きもしなかつた。

「何でもなかつたんでさ。貴女の神経からだつたんです。」

鼠に噛まれた英雄の心臓

獨逸の軍隊が、佛蘭西の國境深く入り込んでゐるにつけて、巴里つ子は、何ぞと言つては大ナポレオンを想ひ出してゐる。ナポレオンを思ひ出すにつけて、またしても繰返されるのは、この英雄の心臓の話である。

心臓の話といふのは外でもない。——忘れもせぬ、一八二一年五月、この英雄の死骸が棺に納められようといふ時、側にゐた一人の軍醫は馴れた手際で死骸から心臓を切り離した。

軍醫は切り取つた心の臓を洋盃のなかに入れて、卓子の上においた。多くの軍人の血と、多くの美人の涙にも、平氣で堪へる事の出來た心の臓は、透き通つた硝子の底で蛙のやうに顫へてゐた。軍醫はこの心の臓にお通夜をするつもりで、じつと眼を瞪つて洋盃のなかを見つめてゐた。

ふと硝子の碎ける音がしたので、軍醫は吃驚して眼をあけた。知らぬ間につひうとうと居睡つてゐたものらしい。見ると、床に落ちて粉々に碎けてゐる洋盃の側を、大きな灰色の鼠が血だらけな英雄の心の臓を啣へて小走りに逃げのびようとしてゐる。

ジョセフインの柔かい手でも、英國海軍の大きな力でも、何うする事も出來なかつた英雄の心の臓を、鼠はたつた一口に頬張つて、その儘逃げ出さうとしてゐるのだ。軍醫は猫になつたやうな氣持で、慌てて鼠に飛びかかつた。實際尻尾の持合せがあつたら、軍醫はその儘猫になつたかも知れなかつた。

軍醫はやつと心の臓を取り返す事が出來た。鼠が吐き出した英雄の心の臓は、失戀でもした

やうに所々破けてゐたさうだ。

「實際吃驚したよ。でも、まあ漸と取り返したがね……」

軍醫は後々になるまで、何ぞと言つては、その夜の話をしたものだ。

だが、噂によると、取り返された心の臓は、ぐちやくちやに噛み潰されてゐるので、夫をナポレオンの心の臓だといつて、神様の前に差し出すわけにも往かなかつた。で、軍醫はこつそり羊の心の臓を切り取つて、それを酒精漬にして、銀の壺に密封したまま、棺のなかに納めたのださうだ。

險呑な世の中だ。女に自分の心臓を約束した男よ。汝は何よりも先きに鼠を要心しなければならぬ。

名女優の冷笑

劇は一人で出来るものでないから、俳優達の互の呼吸が合ふといふ事が何よりも大事であ

る。先年道頓堀で仁左衛門と鴈次郎との顔合せ興行があつた。兩優とも若盛りで人氣を争つてゐる間柄だつた上に、出し物は假名手本忠臣藏で、仁左が師直、鴈が判官といふ役割なので、雙方の鼻眞々々は兩棧敷に分れて、めいめい好きな俳優のために大袈裟な力添をしたものだつた。

派手好きな鴈次郎は、双傷の場で思ひきり派手な行き方をして、舞臺を巧く引つ浚へて往かうと註文をつけてゐたらしかつた。で、火尉斗をあてた白襦袢のやうに、眞青に鯨子張つて舞臺へ出た。すると、案外なのは相手の仁左の師直で、これはまた糊氣のぬけた皮肉な、いつもの型とは打つて變つた冷いやり方なので、鴈次郎の判官は刀へ手をかける事も出来ないで、大弱りに弱つてしまつた事があつた。

英吉利の名女優エレン・テリイが、ひと頃氣難しやで聞えたある男優と一緒に舞臺に立つてゐた事があつた。男優は幕がすむと、例の氣難かしい顔をして樂屋へ入るなり、相手のテリイが大事の正念場なのに、自分の顔を見てにやにや笑ひ續けて居るので、舞臺が懶れて芝居が演にくくて仕方が無いと言ひ出した。

「いやに名優面をして、人の舞臺を見下すやうな笑ひ方をしやがる。一度思ふ様油を取つてや

らなくつちや。」

彼はたうとう同じ劇場にゐる女優あてに手紙を持たせてやつた。手紙にはこんな文句があつた。

「こんな事を申し上げるのは、全くお氣の毒で堪りませんが、私は貴女がいつも舞臺で私の方を御覽になつて笑つてばかり居られるので、芝居が仕にくくて仕方がありません。あれでは全く打毀しです。どうかこれからは、あそこが正念場だといふ事をお考へになつて、貴女の態度を變へていただきたいのです。」

エレン・テリイはその手紙を見たが、相變らずにやにや笑つてゐた。そして次ぎのやうな返事を書いた。

「それは貴方のお穿き違へですよ。私は舞臺でなんか貴方の事をちつとも笑ひは致しません。笑ひたいんですけど、自宅へ歸るまで堪へてるんですよ。」

バルザック

佛蘭西寫實派小説の開山バルザックは、随分たんと小説を書いたが、それだけではまだ書き足りないで、脚本の方へも脚を踏み出さうとしてゐた。ある時友達と二人巴里の大通りを歩きながらこんな話をした。

「僕も一つ脚本でも書いて、うんと金儲をしようかな。なに、本さへ出来上つたら、請合つて四五十回位は舞臺に上げてみせるさ。一回の揚り高がざつと五千法フランとして、百五十回で七十五萬法そのなかから脚本料に十二パーセントを取るとして、少くとも八萬法にはなる筈だね。」

バルザックは胸算用をしながら、寢不足さうな眼をあげて、じつと友達の顔を見た。友達はお附き合ひに調子を合はせた。

「なる程、さう聞けばさういふことになるね。」

「さう聞けばぢやないよ。實際さうなるんだよ。」とバルザックは大きな頭を掉つた。

「この外に劇場以外から入る収入が先づ五千法。それから脚本一冊の賣値が三法として、三萬部でざつと……」

「もう判つた、判つたよ。」

友達は手を掉つた。

「ほんとに結構な話だから、どうかその中から三法だけ今貸してくれたまへ。」

「うむ……」バルザックは家鴨の絞め殺されるやうな聲を出して眼を白黒させた。

猫と四斗俵

世の中に鼠ほど無益な餘計者は滅多にあるまい。あの鼠の征服者として猫を見つけた事は、アメリカ大陸の發見にも優る人生の重大事である。

ゲエテは其の「狐の裁判」で「猫は形こそ小さいが、分別もあり、哲學をも知つてゐる」といつた。實際猫は鼠を捕る以外に、哲學の素養があるので、よく色々の偉い人のお友達となる

事が出来た。佛蘭西の名高い政治家リセリウが、死際に可愛い自分の飼猫に、少からぬ遺産を残したのは名高い話だ。

猫がその遺産を慈善事業に寄附したか、それとも利廻りのいい株でも買込んだか何うかは知らないが、よしんば其の遺産が無かつたにしても、猫は多くの哲學者のやうに空腹を抱へるやうな事は滅多にない。何故なら、猫は哲學と一緒に鼠を捕る事をも知つてゐるから。

議員の俸給に極りがあるやうに、猫の食糧にも限りがある。往時から猫一匹の一年中の食量はざつと米一俵としたもので、もしかこれ以上に食べるやうな猫があつたら、夫は大物食で、哲學者とは言ひかねる。

ところが、斯の事實から、立派な一つの發明を仕遂げた男がある。夫は讃岐の鹽田忠左衛門といふお爺さんで、お爺さんは猫に四斗俵一つは餘り値段が張り過ぎる。

「俺なら其の半分で済ませてみせる。」と自慢らしく言ひ言ひしてゐる。

實際お爺さんは夫を行き通してゐるのだ。その法といふのは、收穫の時粃二斗を鼠一年分の餌として、土間の隅つこに俵の儘残しておくのだ。すると、夜になつて家中の鼠がこそこそ這ひ出して来て、鱈腹それを食べるが、粃二斗で恰度一年分の餌に足るさうだ。

「こんなにさへしておくと、鼠も溫和しいもので、米櫃一つ嚙らなくなる。お蔭で猫なぞ飼はなくともいい。」

と爺さんは皺のよつた小鼻をびくびくさせてゐる。

だが、それは猫を唯の鼠捕りとして見た上のことで、猫はその外にまた哲學者なのである。

喜捨金一文

時鳥が啼くやうになつた。——この鳥が啼く頃になると、いつも青葉若葉の滴るやうな黄檗の空が思ひ出される。

黄檗といへば、那處には名高い鐵眼和尚の一切經の木板が遺つて居る。此の木板に就いては、次のやうな話が言ひ傳へられて居る。

鐵眼は一切經の板行を思ひ立つと同時に、それは一人や二人の富豪かねもちの手で出来上るものではない。一體お經を出板すると、それに關係した人達は、その功德によつてきつと淨土へ生れ

る。富豪はちつとやそつとの費用の喜捨は出来ようが、淨土へ生れるには恰好な人達でないことを知つて居るので、成るべく一切の衆生からその寄附を受ける事にした。

で、先づ其の手始めに、京の粟田口に立つて往來の人に勸化くわんげをすることにした。鐵眼は暫く人通りの絶えた午過ぎの大通りをあちこちと見廻した。すると、土に塗れた水呑百姓が、大きな黒牛を追ひながら、のつそり通り掛つて來るのが目についた。正直で、おまけに沈黙家ちんもくかの牛だ。出来ることなら功德によつて淨土へ入れてやりたかつたが、牛は百姓と同じやうに喜捨金を持ち合はさないらしかつたので、鐵眼は黙つて見送つた。

牛がそこらの木立に隠れると、行き違ひにきりりとした若侍が一人、急ぎ足に西から東へ通り掛つて來た。鐵眼はすぐに飛出した。

「一切經の印行を思ひ立つた坊主でございます。何分の御喜捨をお願い申します。」

若侍はちろりと尻目に鐵眼の顔を見た。此の男は人から物を貰ふことも、人に物をくれることも嫌ひらしかつた。で、素知らぬ顔をして行き過ぎようとした。

鐵眼は一足先へ廻つた。そして侍の前に立塞がりながら、

「どうぞ、御喜捨をお願い申します。」

と佛様がわざと見本にこしらへたらしい大きな頭を下げた。若侍はさつと身を躲しざま、器用にすり抜けて急ぎ足にすたすたと歩を早めた。

鐵眼は後から追ひ継つた。そして、道の二三町も歩くと、また後から「どうぞ御喜捨をお願ひ申します。」

と、うるさく呼び掛けた。若侍はそんなことには少しの頓着もなく、小唄か何かを謡ひながらすたすたと道を急いだ。

鐵眼も同じやうに道を急いだ。かうして道の一里半も来ると、若侍は溜りかねたらしく、たうとう振返つた。

「うるさい坊主だな。」

「うるさいと思召したら、どうぞ御喜捨を……」

「ぢや、喜捨して遣はさう。」と若侍は腰の中着から一文錢をたつた一枚取出した。そして鐵眼の大きな掌面にのせてやつた。「いいか、これが俺の喜捨金だぞ。」

「有難うございます。重々御禮を申し上げます。」

鐵眼は頭が地面につくまで叮嚀にお辭儀をした。高が一文錢の喜捨にしては、お禮が少し負

け過ぎて居ると思つたらしい若侍は不思議さうに聞いた。

「一文錢やそこいらのお金に、何だつてそんなにお辭儀をするんだね。」

鐵眼は頭を持ち上げた。眼は鐵のやうな強い光に輝いて居た。そして自分が今度一切經の板行を思ひ立つた事から、今日はその勸化の第一日なので、もしかかうと思ひ込んだ人から喜捨を得なかつたら、折角の自分の志が挫けはしまいかと思つて、わざわざ一里半の坂道をうるさく追ひ継つて來たのだといふことを打ち明けた。

「さうでしたか。若侍が初めて言葉を改めた。「それは御奇特な事で……」

若侍は一文錢のやうに地面に穴があるものなら身を隠したいと思つたらしかつた。しかしその上喜捨金を出さうとも言はなかつた。

喫煙禁止

グラントと言へば、南北戦争の將軍として、また十八代目の米國大統領として名高い人だ

が、此の人が大統領に就任してから當分の間、田舎の自宅からワシントンへ汽車で通つて居たことがあつた。或日のこと、グラントはいつものやうに借切列車に腰を下しながら、ポケットから葉巻を一本取出して静かにそれに火をつけた。そして香の高い紫色の煙に、犬のやうに鼻をくくんさせながら、一人ていい氣持になつて居た。汽車が途中のある小さな驛に停まると、着飾つた一人の貴婦人が一寸した小荷物を抱へながら慌しく入つて來た。

婦人はグラントの前に席を占めた。それまで南北戦争當時の追懐か何かと思ひ耽つて居た大統領は、眠さうな眼を一寸開けて、自分の前に坐つた婦人の様子をちらと見たらしいが、性來婦人といふものにあまり趣味を持つて居なかつたこの軍人大統領は、其のまま又眼を細めてじつと葉巻に吸ひ耽つてゐた。

すると、だしぬけに癩走つた女の聲が聞えた。グラントは晝寢をしてゐた驚のやうに、怠儀さうに片眼を開けた。見ると、件の婦人が目鯨立ててじつとこちらを睨んで居た。

「あなたどうぞ煙草をお止め下さい。あたし煙つぼくて堪りませんから。」

グラントはそれを聞くと、喫みさしの葉巻をそのまま窓の外に投げ棄てた。そして開けて居た片眼をもとのやうに靜かに閉ぢた。無口な大統領は何一つものを言はなかつた。

グラントが汽車に乗り合はした婦人客に、何一つものを言はなかつたには、何の不思議もなかつた。彼は生れつきのむつつりやで、何時だつたか大統領に在職當時、世界博覽會が米國に開かれたことがあつた。開會式の當日、總裁として何か際立つた演説をしなければならなかつたので、平素の彼を知つて居る人達の中には、この沈黙家がどんな挨拶をするだらうかが可なり面白い話題となつて居た。すると、其の當日彼は椅子から立上り、馬の上から兵卒を指揮するやうな調子で、

喫煙 「今日から博覽會を開きます。皆さん御遠慮なく見物して下さい。」

禁止 と言つたきり、何一つ喋舌らなかつた位だから。

件の婦人客が、不作法な紳士をやりこめた嬉しさに胸をわくわくさせて居ると、汽車はまた次の停車場に着いた。すると、驛長が靜かに扉を開けて入つて來た。そしてその婦人客を見ると聲を尖らして言つた。

「あなた。すぐに此處を出て行つて下さい。こちらは大統領閣下の借切列車なんですから。」
大統領の借切と聞くと婦人は顔を眞赤にした。そして小荷物を抱へて逃げるやうに姿を隠した。

滴水と峨山

宗風の森嚴なので聞えた天龍寺の由利滴水が、確か死ぬる三四日前の事だつた。いつも自分の側で看病してゐてくれる弟子の橋本峨山を呼んで、今更らしく訊いた事があつた。

「お前、天龍寺を再建して、どうしようと思つておいでなのだ。」

天龍寺は維新の當時、薩摩の村田新八に焼捨てられたのを、その後峨山が再建に骨を折つて、やつと出来上るばかりになつてゐたのだ。峨山は師僧の氣に入るやうに聲を和げて言つた。

「老師の御病氣御全快を待つて、今一度宗風を揚げていただきたいと存じまして。」

それを聞くと、滴水は乾葡萄のやうな干からびた顔に眼を光らせた。

「俺が死んだらどうするのぢや。」

滴水は自分の生命が明日が日も持たない事を知つてゐた。よくある禪坊主の癖で、その短い時日を靜かに味はうとするよりも、何か問答に費したいらしかつた。峨山は病人の枕もとに手

をついて言つた。

「その折には、誰か高德な方を招いて、法燈をついで戴きませう。」

滴水の眼は意地悪さうにまた光つた。喘息を病んだ風琴のやうな變にしゃがれた聲で、うるさく付け込んで來た。

「それから、其の次ぎはどうするのぢや。」

それを聞くと、峨山は急に鷹のやうにむつくり頭を持ち上げた。そして腹一杯の聲を張りあげてわめくやうに言つた。

「そんな御心配は御無用でござります。」

大きな聲が、病室一杯に響き、藥壇に響き、そして皺くちやな病人の胸の底にまで響くと、病人の眼は初めて和らいだ。そして氣に入つたやうにつこりと笑つた。

豫言者

京都の工科大学教授N氏が、世界戦役當時、ある新聞記者との對談に、その頃方々に頭をもちあげて來た化學工業會社がどう成り往くものか、例へば鹽酸加里の會社にしても、戦前はたつた一つしか無かつたのが、戦争が始まると、ざつと四十にも殖えた。もしか戦争が済んだら三つ四つしか残らないかも知れないといふ事を話した。

N氏は、その翌る朝京都を發つて九州地方まで旅をしなければならなかつた。混み合つた汽車に乗つてうとうととしてゐると、ふと誰かが自分の名を呼んでゐるので、驚いて目をさました。それは隣席に坐つて新聞を擴げてゐる、會社の重役でもありさうな、でつぶり肥つた大阪辯の男だつた。その男は向ふ側に胡坐をかいた自分の道連らしいのに話しかけてゐた。

「この新聞で見ると、京都大學のNたらいふ男が、今四十もある鹽酸加里の事業が、戦後になつたら、たつた三つはか残らん言ふとるが、たつた三つとは何で決めたもんやらうて。」

「たつた三つ？怪つ體な事言ひよるな。」胡坐をかいた男は鼻の先で笑つた。「そやつたら、こちとらの會社はどうなるんや。阿呆らしい。」

N氏は吃驚した。首を延ばして隣の男の繰擴げて居る新聞紙を覗いて見た。なる程其の男の言つた通り、記事には今の夥しい鹽酸加里事業が、戦後には三つに減つてしまふと、きつぱりと書いてあつた。N氏は自分が「三つ四つしか残るまい。」と言つた言葉を思ひ出して、それをきつぱり三つにしてしまつた新聞記者の勇敢なのに驚いた。そしてかういふ新聞記者を外科醫者にしたら、跛者の患者などはきつと片脚を切り揃へてしまふだらうと思つた。で、その正誤かたがた、自分がその談話をした當人のN教授だといふことを打明けようかと思つたが、でもさうすると、隣の男はきつと會社の株を持つてくれと言ふだらうと思つて、そのまま黙つてゐる事にした。

ところが、戦争も濟んで此の頃になつて見ると、N氏の言つたやうに、數ある鹽酸加里の會社は、次から次へと倒れて行つて、残るものはたつた三つになつた。N氏は人の顔さへ見ると、得意さうに以前の話を持ち出して

「どうだい君、僕が豫言したやうに會社がほんたうに三つになつたから驚くぢやないか。」

と、豫言者のやうな顔をして言ひ言ひして居る。

司令官と一兵卒

遣歐米軍の司令官、ピアシング將軍が、ある日自分の兵卒の宿舎を巡視に出かけた事があつた。多くの兵卒が風琴を鳴らしたり、骨牌を弄つたりしてゐるなかに、たつた一人、一番年齢の若さうなのが、人の居ない隅つこで、じつと書物に読み耽つてゐるのが將軍の氣をひいた。將軍はつかつかと其の若者の方に近づいて往つた。

「何を讀んどるな。」

若い兵卒はひよいと後を振かへつて、慌てて立つて敬禮した。そして愛相つ氣のない調子で返辭をした。

「はい、本を讀んでました。」

「本は解つとる。」將軍は蟹のやうに嚴つべらしい顔をした。「だが、何の本だと訊いとるのぢや。」

若い兵卒は今まで読み耽つてゐた書物を黙つて將軍の手に渡した。將軍はちらと表紙の名前に眼をやつたが、それだけでは何の本だかのみ込めないらしく、中味を二三枚めくつてみて、やつと自分達にはとても解りさうでない本だといふ事だけが解つたらしかつた。將軍は書物から離れた眼をじつと兵卒の顔に注いだ。

「かなり難かしいことが書いてあるらしいが、お前にこんな本が解るのかい。」

「はい、解ります。」

若い兵卒はきつぱりと言ひきつた。

「ほう、それは偉いな。」將軍は胡散さうな顔つきをして、書物を兵卒の手に返した。「だが、どうしてお前に夫が解るな。」

「何うしてつて、別に不思議はありません。」若い兵卒は心もち顔を染めながら言つた。「私はこの本の著者なんでございますから。」

「ほう、お前がこの本の著者ぢやとお言ひか。」

ピアシング將軍は慌てたやうに二つ三つ瞬きをして、じつと兵卒の顔を見た。尊敬すべき若

い著作家は、別段異つてもゐなかつた。馬に似た人間の多い世の中に。

前大統領の嘘

米國の前大統領タフト氏が、ある時自分の政黨員から頼まれて、Somerville の田舎町に講演に出かけて往つた事があつた。講演が無事に済んで、その晩タフト氏は、田舎町の狭つ苦しき旅籠屋に、象のやうな大きな體軀を投げ出して、ぐつすり寝込んだ。

あくる朝、食事を早く済ますと、タフト氏は直ぐに停車場へ急いだ。田舎の旅籠屋で、氣のながい訪問客につかまつたら、どんな酷い目に遭ふかも知れないといふ事をタフト氏はよく知つてゐた。だが、停車場に乗りつけてみると、氏があてにした汽車は特別急行で、そんな田舎町の驛へは立ち停らないといふ事がわかつた。

タフト氏は當惑した。外套の隠しに兩手を突込み、停車場前の廣つ場を歩きながら、大きな靴の踵で暴に地面を蹴散らしてみたが、地面を蹴つたところで急行列車がとまる譯でもなかつた。

さうかうするうちに、タフト氏はいい事を考へついた。で、早速停車場から鐵道管理局あてに次のやうな至急電報を打つた。

「大きな團體客が待つてゐる。特別急行列車を Somerville の停車場にとめてくれまいか。」
暫くすると、管理局から返電が來た。タフト氏はその電報をあげてみてにやりとした。なかには次のやうに書いてあつた。

「承知した。」

時間が來ると、急行列車はけたたましい地響きをさせて入つて來た。前大統領は手提鞆をさげながらのつそりと客車に入つて往つた。すると、擦れ違ひに出て來た列車長は、がらんとしたプラットフォウムを見渡しながら不思議さうにぼやいた。

「大きな團體客つてどこに居るんだらう。」

「それは乃公の事だよ。」

タフト氏は濟ました顔で言つた。

列車長は黙つて前の大統領を見上げた。成程大きな圖體は一寸した團體客ほどの重みがあり

さうに思はれた。

二人は聲を合せて笑つた。

接吻

マベル・ボオドマン嬢といふのは、米國の赤十字社でちやきちやきの働き手だが、嬢の意見によると赤十字の勤務はひとり戦時のみでなく、平常の衛生状態をもつと立派にし、そして出来る事なら、天國へ送る死人の健康状態をも申分の無いものに仕なければならぬのださうだ。

嬢は先頃南米地方へ旅行をした事があつた。その折ある地方で、皮膚の赤茶けた土人が地面に蹲かひつてば居つて、玉蜀黍の煙管で脂くさい煙草をすばすばやつてゐるのを見かけた。

ボオドマン嬢は雌狗のやうに鼻を動かした。そして言つた。

「爺や。お前そんな脂臭い呼吸いきをして、天國へ往けるとお思ひかえ。」

「ひ、ひ、ひ……」と土人は齒の抜けた口で笑ひ出した。「脂臭え呼吸だと言はつしやるが、

おいら死ぬ時にや呼吸引き取りますだよ。」

むかし、道命といふ名高い坊さんがあつた。怖しく聲の美しい人で、お經を誦むと、その調子が自然に律呂に合つて、まるでいい音楽でも聴くやうな氣持がするので、道命が法華を誦むとなると、大峰から、熊野から、住吉から、松尾から色々の神様が態々聴きに來たものだ。そんな折には、道命は一寸後を振り向いてみて、

接 「今日も神様が來てゐられるな……」

と、得意になつて一段と聲を張り上げて讀んだ。

道命は和泉式部と好い仲だつた。(道命だつて男だから女を愛するのに不思議はないが、僧侶といふ身分に對してすこし不都合だと思はれる向は、どうか成るべく内聞にして置いて欲しい。道命も名僧だし、和泉式部も聞えた歌人の事だから。)ある夜式部の家で寢て、翌る朝何喰はぬ顔で寺へ歸つて、例のやうに法華を誦みにかかつた。

ふと後方を振り返つてみると、いつも見馴れた立派な神様達の代りに、薄汚い乞食のやうな佛様が一人立つて居た。道命はお經を誦みさして訊いた。

「貴方はどなたですか。」